
焔の騎士

神崎亜実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焔の騎士

【Nコード】

N1708J

【作者名】

神崎亜実

【あらすじ】

これが私の騎士の誓いです。

軟禁状態のルークにある日、近衛騎士が配属されることになった。その青年の名前はクロウ・レイウォルト。第一印象は最悪、意味の分からない『誓い』とやりに怒るルークだったが、誕生日の日、クロウの言う『騎士の誓い』の本当の意味を知る。これは、やがて『絶対の騎士』と呼ばれることになる、とある騎士の物語。

TOAの夢小説です、BLか友情かは読んでくださった方の判断にお任せします。

第1話「クロウ・レイウォルト」（前書き）

この小説を選んでいただき、ありがとうございます。

さて、この小説はTOAの二次創作、さらには夢小説です。苦手な方はご遠慮お願いします。また、男主人公ですので、そういったものが苦手な方もご遠慮おねがいします。

次に、内容についての注意です。この物語は。

- ・主人公が突然好かれたり、意味もなくキャラが惚れるなどの逆ハ
ーでもありません。
- ・出会ったばかりのキャラとの関係は非常に険悪なムードが漂って
おります。
- ・けれど一般的にいう『嫌われ夢』というわけでもありません。
- ・この夢小説の基本は『愛されるよりも、愛する』です。
- ・BLか友情かは、この『近衛騎士編』に関しては読んだ方の判断
にお任せします。

それでもよろしければ、拙いものですが読んでくださると嬉しいです。

第1話「クロウ・レイウォルト」

それは、ルークが誘拐されてから5年の月日が流れた時のことだった。

ヴァンとの稽古の途中に呼ばれたルークは機嫌を損ねながらも渋々と父親の居る応接間へと向かった。

「失礼します、父上」

その口調から不機嫌さが隠せないルークは、嫌そうな目で父親を睨んだ。しかし、それが無駄だと言うことはルークが一番よく知っている。

自分の父親は、自分がどうなってもいいかのように父親の役目を放棄しており、まったく関心というものがなかった。

息子の自分にさえ、こうして何か用事がある時にしか呼ばない。それ以前に、この父親と親子らしい対話というものをしたことがない。

「うむ、そこに座りなさい」

低い声がいい終わる前にルークは自分が座るべき父親の前の席に座った。その時に気づいたのだが、父親の横に見慣れない姿の少年が自分の父親の横に立っていた。

黒い衣服を纏った少年は、今まで自分の周りで世話をしていた使用人とは何かが違う気がした。まるで、蠟人形のように冷たく生きているのかすら分らない。

息子の視線が少年に釘付けなのに気付いたファブレ公爵は少年の肩に手を沿え少年に視線を移した。

「クロウ、自己紹介なさい」

ファブレ公爵のその言葉で少年はまるでぜんまい仕掛けの人形のように動き始めた。

「初めましてルーク様、今日からルーク様の近衛騎士となりますクロウ・レイウォルトと申します」

「近衛騎士いい?！」

ルークは今まで何度か近衛騎士というものを見てきた、しかしまさか軟禁状態の自分に近衛騎士がつくとは思ってもいなかったのか腑抜けた声を出した。

正直、こんな屋敷の中で近衛騎士を連れるなどなんて無意味なことだろうか。そんなものに市民の血と涙の結晶である税金を回すなどもつたない。

そもそもルーク自身も近衛騎士には飽き飽きしていた、これではただでさえ不自由な生活がもっと不自由になってしまう。それは何かなんでも避けたい状況だった。

きつい視線でクロウの方を見るがクロウはまったく反応しない、大抵使用人は公爵家の一人息子を怒らせたのかとあたふたするものだが、クロウはルークだけを見つめていた。

「父上！ 近衛騎士なんていらねえよ！」

「ルーク、理解しなさい。国王の命令だ」

「叔父上の？ なんだよ、俺を軟禁するだけじゃ飽き足らねえで、こんな黒くてきもちわるい奴を近くに付けろってかあ?！」

「ルーク！ 言葉を慎みなさい」

しかし、気持ち悪いと言われた本人はそんな言葉なんとも感じていないのか無表情を続けた。

『なんだよ、こいつ……』

それが気に食わないのかルークは舌打ちをした、なにより気に食わなかったのは近衛騎士を付けることにいくら反対しても了承されないからだ。

父親はいつもそうやって勝手に決めてしまうのだ、自分の意見を聞いてくれない。いくら嫌だと言っても話を進めてしまう。それがとても気に食わなく、そして酷く悲しかった。

まるで、自分の意思など無いように扱われることがどれほど悲しいことが。

「それに、こいつ俺と対して年齢変わねえじゃねーかよ！　こんな弱そうなやつ……っ！」

ルークがそう言った瞬間、クロウの瞳が冷気を帯びたものになった。その瞳を見た瞬間、なにかとても大変なことをしてしまったのかもしれないと感じた。

それほど、クロウの瞳は不気味なものだったのだから。

「な、なんだよ」

その視線に耐えられなくなったルークは対抗するかのようにつきつく睨み返した。しかし、クロウはただ無言でそこに立っているだけで何もしてこない。

そんな二人を交互に見合い、これは長くはもたないと感じとった公爵は深いため息をついた。この空気をそのまま続ければルークの負担になると思い、何時までたっても収まらないであろう無意味ないさかいに終止符を打つために軽くてを鳴らした。

「そこまでだ、クロウ……誓いをしなさい」

「誓い？ 何かやるのかよ」

「一種の仕来りだ、主に忠誠を誓うレイウォルト家独特のものだと聞いているが」

ファブレ公爵はクロウに視線を送るとクロウはゆっくりと歩き出しルークの目の前で止まった。あの瞳で見下ろされるのは怖いのと同時に、とても腹立つものがある。

だが、ここで立つのもクロウにあわせるようで気に食わない。ルークは一瞬躊躇ったが結局はたたないことを選択した。そうだとも、自分は主なのだから近衛騎士のためになぜ立たなければならないのだろうか。

すると、今までファブレ公爵に命令されてしか喋らなかったクロウが口を開いた。

「何故、立たないのですか？」

そのかすかな言葉に、ルークは自分が上だということを見せ付けるかのように自身満々に言った。

「なんで俺が立たないといけないんだよ」

「仕来りです、お立ちください」

「仕来りい？ んなもんさっさと適当にやってくれよ。俺が立たないと出来ないわけじゃねえーだろーに」

「お立ち下さい」

「なっ！」

いったいこの少年はなんなのだろうか、同じ言葉しか繰り返さずひたすらルークに立てとお願いしている。

普通は仕来りだろうが何だろうか相手が自分に合わせるべきなの

だ、こちらは雇う側なのだから当然命令する権利はこちらにあるはずなのだ。

しかし、クロウはそんなもの知ったことかと言いたそうに視線をそらさない。それにしびれを切らしたルークは不機嫌そうに口を開いた。

「だーもう！ そんなものに意味なんてあんのかよ、どーせ誓いなんてお飾りなんだ」

その瞬間、その場に居た誰もが驚いた。

いままで下ろされていたクロウの手が、ルークの頬を叩いたのだ。そのせいなのか、ルークの頬には赤い跡がくつきりと残っている。

「な、なにすんだ……っ！ お前は俺の近衛騎士なんだろ？！」

ルークの言葉に誰もが納得した。近衛騎士とは主を守り抜くことが仕事であり、決して手を上げるなどという横暴なことをしていない立場ではない。

そもそも、今このキムラスカ王国でルークの頬を叩いてもいい人間が何人いるだろうか。両親にナタリア、それから国王と数えれば片手で足りてしまうほどの数しか居ない。

ファブレ公爵家の一人息子で第三次王位継承者、将来国王になることを約束されている王族。これはクロウが子供だからと言って決して許されるようなことではない。

嗚呼、なんて愚かな子供なのだろう。その時誰もがクロウを哀れんだ。けれど。

「誓いは騎士と主の間に絶対の服従があることを証明するもの！ それを蔑ろにする者に忠誠を誓うなど反吐が出る！」

クロウは怒っていた、目は見開き左手は握りこぶしを作り口調は先ほどのクロウとは思えないほど丁寧ながら荒々しいものだった。すると、この状況を見かねてか、それとも哀れな同胞を止めようとしたのか白光騎士団は一瞬にしてクロウの回りを取り囲んだ。

「行動を慎めクロウ・レイウォルト！ ルーク様に手を上げるなど騎士として失格だ！」

一人の騎士がそう叫んだ、しかしクロウはルークを睨み続けることを止めない。それほどまでクロウにとって誓いというものは大切なものだったらしく、それを『お飾り』と言われたせいか主の前だというのにこの行動。

愚者と称すしか他に言葉が無い。いくら大切なものだろうとこの態度、正直馬鹿とは思えない、そう誰もが思った。

「謝りなさい、クロウ」

「このような無礼者に謝れと？ 誰がそのようなこと……っ！」
「クロウ！」

騎士の声が食堂に響き渡る、だがクロウは謝ろうとはせず謝罪を要求してきた騎士を睨むだけだった。

「仕方ない、クロウ・レイウォルト……君には一週間の研修期間が必要らしい」

ファブレ公爵は深いため息をつきクロウに視線を送った、するとクロウの視線は先ほどの虚ろなものになった。

しかし、それが納得いかないルークはただクロウを睨むばかりで一向に収集がつきそうにない。しかし、次の瞬間ルークのその視線

は父親に向けられるものになった。

「一週間、見習い騎士としてルークを護衛しなさい」

「はあ?!」

まったく信じられない言葉だった、ついさっき目の前に居る少年は息子である自分を叩くどころか暴言まで吐いたのだ。

いったいどちらが無礼者だろうか、そんなものの周りの人間の目から見れば公爵子息に無礼を払ったクロウの方に決まっているのだ、そんなもののすぐに解雇するべきだろう。

だが、目の前に居るファブレ公爵はそんなもの無かったかのように振舞っている。

「どういうことだよ!」

「ルーク、我侭は止めなさい。クロウ・レイウォルト分かったか?」

すると、クロウはまた無表情のままルークを見た。そして機械的な声で、主の命令に従った。

「分かりました、ファブレ公爵様」

「父上! 俺はこんなの認めないからな、こんな……こんな奴が俺の騎士になるなんて!」

ルークの反抗する気持ちは誰にでも分かった、しかしこの場で一番立場が上なのはファブレ公爵であり彼の言葉は絶対である。

そのことが分かっているのか、誰も反対意見を言わない。それが納得いかないルークは父親を睨み続けた。しかし、いくら睨んだところで結果は変わることはなかった。

『くそっ……！　またかよ』

いつたい、あとどれくらいの月日を過せばこの不自由から逃げ出すことが出来るのだろうか。

母親は成人を迎えれば自由になれるといった、しかしそれは成人するまで絶対に自由は与えられないという意味だ。ただでさえ精神的な苦しみがこれからまた増えることになる。

そんなこと、考えるだけでもいやなことだった。だからルークはいつも願うのだった、早く自由になりたいと……心のそこから自由を渴望していた。

「ルーク様」

不機嫌なルークに話しかけてきたのは、その原因であるクロウだった。

クロウは先ほどの虚ろな瞳とは違った、意思のこもっている瞳でルークを見つめた。その先ほどと違う瞳にルークは一瞬驚いた。

「な、なんだよ……」

「この一週間で、ルーク様の考えを変えて見せましょう。そして必ず一週間後に思うはずです、誓いをしたいと」

あまりにも自身高らかに宣言された言葉は、ルークの反抗心を芽生えさせ刺激するのには充分すぎるものだった。

「そーかよ！　やってみろよ！　俺が頭下げてお前と誓いたくなるようにしてみやがれてんだ！」

誰がこんなやつと誓いをするものか、誰がこんな無礼者を近衛騎

士にしてやるものか。

いかに自分が愚かで大きな過ちを犯しているのか思い知らせてやる、その考えが自意識過剰のナルシスト的な考えなのかを実感させてやる。

それが、二人の一番最初の出会いだった。

第2話「似たもの同士」

朝を告げる小鳥たちの囀りが聞こえ、ルークは重たい瞼を持ち上げた。もうすぐ春だというのに布団の外はまったくその気配を見せない。

まだ冬の名残だろうか、僅かに布団から出た手には寒さが刺すように襲ってきた。予想以上の寒さにルークは再び暖かい布団に包まり外の寒さを遮断しようと布団をかぶる。

このままもうひと眠りしようと考えた時、聞きなれない声がルークの部屋に響いた。

「お目覚めになりましたか？ ルーク様」

それは普段自分を起こしにやってくるメイドでもなく、いろいろと不慣れな使用人兼親友のガイの声でもなかった。

声変わりをした、少年よりも青年に近い声。まさかと思いルークは布団から顔を出し声のした方向を向いてみた、するとそこには身なりをキチンと整え真剣を背中に掲げる少年が居た。

「おおおおお、お前！」

何時の間に入ってきたのかという疑問の言葉を出す前にクロウはルークに近付く。

「お目覚めのようですね、着替えますか？」

「着替えますかじゃねえ！　なんで俺の部屋に入ってきてんだよ！」

「護衛の為です、今後からルーク様が寝ている時は此处で護衛をしますのをご理解を」

一瞬頭痛に襲われた、今まで頭痛の症状はあったがこれはそれはまったく違うものだ。

近衛騎士とはいえ何故こんなプライベートの中まで入られなければならぬのだろうか、それ以前にまかさ昨日の夜からクロウはずっとこの部屋に居たのか。

だとしたら、こんな近衛騎士を雇った父親を問い詰めたい。普通はドアの外で見張るものだろうに、自分の部屋に踏み入るなんて最悪の状況だ。

「ふざけんなよ！ 早く出てけ！」

「そう言われましても、危険ですので」

「危険?! こんな屋敷の中で何が危険だって言うんだよ」

そうだと、これが町の下界だというならばまだ意味もわかる。

しかし此処は貴族街のファブレ公爵の豪邸であり、城とまではいかないが警備はかなりのもの。

そのファブレ公爵家のご子息の部屋とくれば侵入してこれるものなど居ない、何か特殊な能力者でもないかぎりルークの部屋に入ってこれるわけがないのだ。

だが、ルークの答えをクロウはあっさりと否定した。

「危険です」

あまりにもあざりと返されたルークはその清さに呆れた。

「あのなあ！ だからどこが危険なのか教え……っ！」

「先ほど、ガイ・セシルが窓からルーク様の部屋に入ろうとしていました」

「が、ガイ？」

クロウは部屋の唯一の窓に視線を移した、いつもは鍵が掛かっていない窓にはがっちりと二重にロックがかけられていた。

「はい、窓を開け侵入しようとしたのです。鍵が掛かっていたことに驚いていたようでしたが」

「あたりまえだろ！ あいつはいつも俺の部屋に入ってくるんだ、てか窓の鍵閉めたのかよ！」

親友であるガイにはいつでもルークの部屋に入れるように部屋の鍵を常に開けていた。

こんな朝に何か用があつたのかは知らないが、それでもガイはルークが心を許す数少ない親友だ。その親友との対話をこんな無愛想な近衛騎士に拒まれるなんて。

しかし、クロウはそんなことを気にしていないのか、むしろ叱るような口調で話し始めた。

「もちろんです、鍵を開けっ放しなど無用心すぎます。勝手ながら締めさせていただきます。それよりルーク様とセシルの関係を教えてもらえないでしょうか。ことによってはすぐに始末をつけなければならぬのです」

クロウは今にでもガイの腸を抉ってやるとでも言わんばかりの殺気を放ち、腰の大剣に手をかけた。

のこのことドアからガイが入ってこようものならば、すぐさまクロウの大剣がガイの首に突き刺さることになるだろう。

「ガイは俺の親友だ！」

そんなクロウの殺気が、ルークには気に食わなかった。

ガイはヴァンには及ばないがルークが信用している友人で、決し

て自分を殺そうなどという考えを持っているわけがない。もちろん証拠があるわけないのだが、それでも親友を侮辱されたようで腹が立つ。

「親友だろうと、危険です。ルーク様は自分の立場を分かってらっしゃらない。いかに自分が危険な立場に居るのか……」

「だとしてもガイを侮辱すんじゃない！ あいつは俺の親友で……っ！」

「私の役目はルーク様をお守りすることです、この屋敷の全ての危険から、この国の全ての危険から、この世界の全ての危険からお守りすることが私が存在する意味なのです」

たしかに、クロウにはルークを守ることは出来るだろう。年齢のわりには引き締まった肉体に、同年代とは思えないほどしっかりとした性格。

なにより同じ剣の道を進むものとして分かる、否……分ってしまったのだ、クロウはとても強いのだ。いくら探したって隙が無い、出来るものならば突き飛ばしてしまいたい。

さきほどから何度も隙を探し突き飛ばしてしまおうと考えたのだ、しかしどれだけ探そうとクロウは一切そんなそぶりを見せない。

昨日は自分と同じ年くらいだと思って油断していたが、さすが公爵子息の近衛騎士として選ばれるだけあって体も作り上げられている。

初めて会った時にはローブを羽織っていたせいで分からなかったが、二の腕は引き締まっており腕相撲しようものならばいとも簡単に負けてしまうだろう。

「なんでだよ、俺だってヴァン師匠と稽古してんのに……っ！」

そして自分の腕をみて思った、たしかに同じ年の子供よりは筋肉

がついているがそれでも僅かなものだ。クロウと比べればあまりにも貧相でお粗末なものだった。

それが悔しくて、ルークは布団の中にもぐった。

「早く出てけよ！」

「しかし、ルーク様」

「出てけ！ 着替えるんだよ！」

しかし、それでも出ていこうとしないクロウにしびれを切らしたルークはベッドから下りクロウに迫った。

「出てけ！ それとガイを呼んでこい！」

「セシルですか？ ですが、セシルを部屋に呼ぶならば私も一緒に……っ！」

その時、クロウの言葉を閉ざすかのようにルークの部屋がノックされた。

「ルーク様、失礼します」

それはガイの声だった、ルークは救世主がきたとでも言うかのようには笑顔になった。しかし、その対象にクロウの顔は厳しく険しいものへと変化していた。

ルークの入室を許可する声と同時にガイがドアから影を覗かせた。

「ルーク……様？ と、クロウ・レイウォルトか？」

「セシル、ルーク様に御用でしょうか？」

「ああ、そろそろルーク様が起きる時間だと思ってな。それに、なんかルーク様に呼ばれた気がしてな」

するとガイはルークの着替えを持ってルークの傍まで行く、するとルークはガイの目の前に立つ。しかし此処で自らルークが寝巻きを脱ぐことはなかった。

ガイはそれが当たり前かのように一つずつ寝巻きのボタンを外していくのだった、まさに上下関係のお手本のような姿にクロウは何故か悔しそうな顔をした。

本人も、自分がこんな考えを持つことが少々不思議なのか微妙な表情をした。すると、ガイが感情をまったく含まない声で言った。

「おっと、出ていってもらっていていいか？」

ルークを見つめながらガイが放った言葉にクロウが反応するまで時間がかかった。きつとあの二人に見ほれていたのだろう。

言い返したくなり口を開こうとした時だった、ガイは先ほどと同じ、しかし微かに悪意が込められた口調で続けた。

「ルークも『信用できない近衛騎士』に着替えを見られたくないだろうしな」

「っ！」

それは、侮辱にも等しい言葉だった。近衛騎士とは主との信頼関係によつて成り立つものであり、その主から信頼されていないということは決してあつてはならないものなのだ。

そんな『あつてはならない屈辱的な状況』に自分があり。なおかつそれを否定できないと改めて思い知らされたクロウは何も言えなかった。

たしかに、今のクロウはルークの信頼を得たとは言えない。むしろ嫌がられているのだ、主人の好意を得るのも一種の役目ではあるのだから、その辺は経験不足が影響していた。

「分かりました、しかし外で見張らせていただきます」

今のクロウには何も出来ない、ここで強く留まることを選ばざらにルークに信頼されることは望めない。

クロウは悔しそうな表情で、ルークの部屋の扉を開けた。

「信頼の得方、ただ完璧に守るだけではダメなのか？」

ドアの外で小さく呟いた言葉は、クロウがいかに経験不足なのかを物語るのには相応しい言葉だった。

しかし、今はクロウに助言を与えてくれるものなどいるはずがなく、クロウはただ一人でその答えを見つけるしか出来ないのだった。

クロウが出ていった部屋では、ルークが一息ついていた。高級な生地で出来ている服をガイに纏わせてもらったルークは、その名のとおり焰のように美しい髪をガイにとかしてもらっていた。

「ホント、あのクロウってやつ……勝手に窓しめんなっつーの！」

「おやおや、ルーク坊ちゃんはお怒りかい？ まあ、たしかに自分の部屋ですつと見張られていたんじゃ息も詰まるわな」

ガイはそうやって笑っているがルークは昨日のことや鍵を閉めたことを未だに起こっているのかリンゴのように頬をふくらましていた。

たしかに、あれでは息も詰まるというもの。あのままガイが現れなければルークは強制的にクロウを排除していたかもしれない。まあ、そうされても仕方の無いことなのだが。

「まっ、クロウもお前の近衛騎士ってことで不安なんじゃないの？」

「なんで不安なんだよ」

「そりゃ、お前は天下のルーク坊ちゃま。第三位王位継承者でファブレ公爵の一人息子、そんなすげえ奴の近衛騎士なんだから責任重大なんだよ」

とは言っても、部屋に入って一晩中見張るのはやりすぎだとガイは思った。

いくら責任重大とはいえ、プライベートまで入るのはやりすぎだ。そもそも、主であるルークが許可をしているのならともかく信頼関係が出来ていない状況であの行動は無謀すぎる。

見た感じでは、ルークとはまた違ったタイプの人間関係が不得意らしい。いくらファブレ公爵が直々に選んだとはいえ、やはり子供だ。

「そういえば、昨日は酷かったらしいな。なんでも叩かれたとか」

「そうなんだよ、あいついきなり殴ってきたんだぜ！ 普通クビだろ？！」

その話は使用人たちの間でも話題になっていた、あのルーク様を初対面で叩いてしまったのだから。クビにならないのはクロウの父親が伯爵という地位だからだろうかと噂が立った。

しかし、ファブレ公爵にとってレイウォルト伯爵などという貴族は親交もなければどうでもいい貴族でしかないのだから不思議だった。

「それは俺も気になっているんだよな」

「俺が言っても親父は聞かねえしよーホントうぜーぜ」

ルークはいつきにベッドに倒れこんだ、本当に気付かれているだろう。

「まあ、少しずつでいいからなれていけばいいんじゃないか？」

「んなのゴメンだ！ はあゝ早くあいつどっか行かねえかなあ……」

ガイは苦笑しながらルークの愚痴を受け止めた。たしかにルークの気持ちも分かるが少々クロウも不憫なものだと思った。

「（ルークの騎士になるのは一苦労だろうな）」

ルークの我侭っぷりは使用人兼友人のガイが誰よりもわかっていた。とは言っても、充分クロウにも責任はあるのだが。

一度意地をはるとルークは絶対に譲ろうとはしない、そんなルークの心を動かし近衛騎士として認めてもらうには、少々クロウには不可能かもしれない。

「どうする？ そろそろ朝食だけど行くか？」

「そうだな、遅いと親父がうつせーからな……」

ベッドから勢いよく身体を起こしたルークは、部屋のドアを開けた。するとその目の前5センチのところにクロウはたっていた。

不意打ちとも思える距離の近さに驚いたルークはすぐに仰け反った、その反応が不思議なのかクロウは首を傾げる。

「お食事でしょうかルーク様」

「そーだよ、てか部屋の前に立つんじゃねー！」

「ですが、護衛ですのうで」

だが、どうやらクロウも人一倍意地だけははるらしい。その点で

は、クロウもルークも似たようなものだと言いは思った。

第3話「イタズラ」 前編

それはある昼下がりのことだった。

朝食を済ませたルークはガイと一緒に剣舞をしていたがガイが仕事で買い物に行くことになってしまった。仕方なく厨房でお菓子をつまみ散歩をして暇を潰すことにした。

だが、ルークの後ろにはものすごい気を漂わせ常にクロウが立っていた。それが窮屈すぎてついにルークは悲鳴を上げた。

「だから、いい加減にしろってーの！」

ルークのその言葉はいつたい何度聞いたことか、周りに居る召使たちは二人の関係にため息をついた。

「護衛ですから」

そして、クロウのその言葉もいつたい何回聞いたことやら。すでに数えることすら意味は無いのかもしれない。

クロウはそれはしつこく、それが仕事なのだから仕方はないのだがルークに着いていた。

「（黒髪野朗めえ……）」

心の中で悪態をつくがクロウはまったくそれに気付く気配は無い、そろそろなんとかしなければルークが限界だった。

ふと視線を上げるとお屋敷の中にある比較的小さな森が視界に移った。森の中に家があるのではなく、家の中に森があるのだから王族とはたいしたものだとルークは思った。

この森は、浅いところには薔薇園があり使用人やファブレ夫人の

目を楽しませている。もつと奥深くへ行けば小動物たちが居り些細な狩を楽しむことも出来た。

とは言っても、取れるものなど鹿ぐらいしかないのだが、それでもルークは狩を楽しむ気にはなれなかった。

「（鹿なんて狩って何が楽しいんだか……）」

いつそ此処に逃げ込もうかと考えたが、今は鹿が発情期なのであまり近寄るなどガイから言われたことを思い出した。

それだからだろうか、ルークが少タイジワルな遊びを思いついたのは。

「そうだ……っ！」

今までルークはクロウに散々やられてきたのだ、何かお返しをしてやらないとこのいらいらは一向に収まることはないだろう。

薔薇園への道を歩くとクロウがついてくる、微かに後ろを確認しながらルークは作戦を実行した。

ルークは薔薇園にはいった途端に全速力で駆け出した、それに一瞬驚いたクロウはすぐにルークを追いかけたが反応が少し遅く視界からルークが消えてしまった。

「よし！」

ペルーご自慢の薔薇園は退屈なルークに少しでも楽しんでもらおうと安易な迷路になっている。それは視覚も多くクロウを惑わせるのには充分なものだった。

ルークは手馴れた手つきで迷路を攻略していくがクロウは少々戸惑っているのか足音が段々はなれていくのが分かった。

一瞬、クロウに勝利したとルークは喜び勝利を噛み締めるように

左手を握った。

「へへ、ざまあみろってんだ……あ？」

しかし、クロウはルークに勝利を噛み締めたままにはさせなかった。

「な、なんだとおお?!」

クロウは強引にも2メートルはある薔薇の迷路の上に立ったのだ、そのせいで薔薇は見事なまでに散ってしまいペルーが気の毒だ。

だが、クロウはそんなこと知ったことかとも言いたそうに素早く薔薇で出来た壁を渡ってはルークを探し回った。もちろん迷路とは上から見れば相手が何処に居るかなど安易に分かってしまう構造だ。

「ルーク様!」

その声と共にルークの目の前に見ほれてしまうほど華麗にクロウは着地した。これでは後々似たような登場の仕方の使用人に批判を買いそうだ。

突然逃げたことを怒られると思ったルークは、後々くるだろうクロウの怒鳴り声に身を構えた。しかし、その声は何時まで待っても訪れることはなく、代わりにクロウの普段と変わらぬ声が薔薇園に響いた。

「大丈夫ですかルーク様?! 荊で怪我をしておりましたらすぐに譜術をかけますが……」

それは、ルークが逃げたことを責める声ではなく傷は無いかとい

う心配の言葉だった。

あまりにも優しい声に、一瞬ルークは戸惑った。昨日自分を叩き罵倒の言葉を浴びせてきた人間とは似ても似つかないのだから。

「ルーク様……？」

だから、優しいクロウに一瞬ときめいてしまったのだ。今まで自分にまわりついては堅苦しい思いをさせてきたクロウがふいに見せた優しさ。

なんとも人は相手に予想外の行為をされると安易に落ちてしまうのだと実感させられる。

だが、此処はツンデレ貴族坊ちゃんの称号を持つルーク。一瞬気に入ってしまったクロウへの思いを振り切り強がりな言葉を発した。

「んだよ！ 俺が逃げたつてすぐ追いつけるってか？！」

「まあ、訓練は受けておりますので。不慣れた場所でも追いつく自身があります」

「……っ！」

本人はその気ではないのだろうが、なんとも嫌味つたらしい言葉だ。それに気付いていないのだからさらにたちが悪い。

一瞬だけでも気を許してもいいかもしれないと思ったが、そんな考えはどこぞへと吹っ飛んでしまった。

「もう知るか！」

「る、ルーク様?!」

そう叫び、ルークは再び薔薇園を駆け抜けた。

どうも、走り出したい気分になったのだ。自分と年齢がさして変わらぬクロウに追いつかれ、さらになんとも無いかのように余裕の

表情を見せるのが悔しい。

ガイは4歳違いだからまだ納得できた、ヴァンは師匠だから自分より強いのは当たり前だ、白光騎士団は選ばれたのだから当然だ。けれど、クロウと自分はたった1歳しか年が違わないのにあんなにも早い。それは、自尊心の高いルークの心を貶すには充分なものだ。

「俺だってヴァン師匠に鍛えられてんだぞ……っ！」

その弟子の自分がこんなに弱いのが気に食わない、まるで自分の師を傷付けられたかのように感じる。

もしも、クロウをちゃんと騎士として認められていたらこんな気持ちにならなかったのかもしれない。頬を叩かれた時からルークの中に芽生えていた対抗心。

クロウは自分の騎士になど相応しくない、それを示す為に自分はどんな方法にしろクロウに勝たなければならない。

「くそ……っ！」

それが、15歳の……否、5歳の子供が考え付くクロウへの対抗心だった。

「っ……はあ、はあ！」

全速力で逃げたルークは、その苦しさ立ち止まってしまふ。消費した酸素を取り込もうとルークは大きく呼吸をする。

すると、視界にとある場所が目映った。よく見なければ分からない木に空いた空間だった。

「あれは、そうだ……っ！」

以前、父親を困らせようと森に隠れたことが何度かあった。その時当然森も搜索されたのだがことごとく見つかってしまった。

けれどもあの場所だけは誰にも見つからなかった、それ以来ルークは何度か気分がさえない時はあそこに隠れることにした。そして、まだ誰も此処に隠れたルークを見つけたことが無い。

後ろから足音が聞こえてくる、行動するならば今だと感じるルークはすぐさまその茂みに飛び込んだ。

「ルーク様！」

クロウはルークを追って森に入るが既にルークはクロウの視界には入らぬところまでできてしまった。その為、この森になれていないクロウはすぐにルークを見失った。

うろろろしながら焦るクロウをルークは茂みの影から笑みをこぼしながら見ていた、今度こそクロウに勝ったのだと。

「ざまーみる！」

その小さな声にクロウは気づくこと無く、そのままクロウはルークを探しながら森の奥へと入っていつてしまった、その焦り具合といたら普段はクールなクロウだからこそ笑える。

こうやって使用人を困らせるのは軟禁生活を強いられているルークにとって楽しい遊びだった。

「さあゝて、もういったか？」

クロウが完全に森の奥にいったことを確認してルークはこっそりと茂みから姿を現した。

だが、困ったクロウが見えないところに行ってしまったのでは困

った顔が見れないのでつまらない。父親からもらった銀時計を開くとすでに時計は3時を示していた。

そろそろガイが帰ってくる時間、ならば早く帰りクロウを自分なりに打ち負かしてやったことを教えてやりたい。ならば早く帰るべきだ。

「あ……っ」

一瞬、クロウが通った道を見た。このまま帰ればクロウはどうなるだろうか、ルークから目を離したとして父親に叱られるのだろうか。

それはそれで楽しいかもしれないと思ったが、さすがにそれはまじいかもしれない。だが、クロウへの恨みや理不尽さが溜まっていたルークはすぐに帰り道へ向かった。

「悪いのはあいつじゃねーか、俺は関係ねーからな」

怒られるのはクロウであって自分じゃない、そもそもルーク自身クロウには早くクビになるかどっかに行ってほしいのだ。

それにこの後、ガイとだべっているところをクロウに監視されずにすむならば万々歳だ。そもそも薔薇園に行ったこともクロウの監視を振り切るためだったのだから、こうなったのならば計画通りだ。どうせクロウだってルークが居ないことが分かれば屋敷に戻るかもしれない、そこでさらに恥をかかせてやることだって出来る。

「ふん……」

ただ、やはり罪悪感があった。クロウをこのまま放置し困らせることに、いくら自分は怒られないからといってクロウの一生懸命さを見ていると何故か身体の動きが止まってしまう。

ガイの言っていたクロウの努力、それがどんなものなのかルークは知らないわけではない。ただそれに応える気が無いだけだ。

「なんよ、別にいいじゃねーか」

けれど、今だけは自分の本心に気付かないふりをして。

第4話「イタズラ」 中編

騒ぎがルークの耳に届いたのは、夕飯の少し前のことだった。

「なあ、ルーク。クロウを知らないか？」

「クロウ……クロウがどうかしたのかよ」

「それが、クロウが居ないんだ。部屋の分担のことで話しがあったんだが」

ガイから話を聞くと、どうやら先ほどからクロウを見かけておらずどこを探しても居ないということだった。ルークを見かけたメイドにも聞いたが近くにクロウの姿は無く、どこかへ行ってしまったらしい。

そこまで聞いてルークはまさかと思った、ガイは言うにはクロウは今日の昼ごろから居ないらしい。ということは、クロウの居場所は一つしかない。

「ん？ どうかしたのかルーク」

「い、いや……なんでもねえ」

探しても見つからないということは、どうやらクロウはまだ帰ってきていないらしい。最悪の場合まだ森の中をさ迷っている可能性だってある。

ルークは窓から見える森を見つめた、もしかしたら迷っているのだろうか。しかし、森は迷うほど広くは無い。ということはまだ探しているのだろうか。

しかし、時計はルークが自分の部屋に戻ってから3時間も時間が経っているのだ。さすがに未だに居るとは考えにくい。

「そうか、なんか知ってたら教えてくれ」

そう言うたが、急いでクロウを探しに行つた、ガイが出ていったドアを見つめながらルークはため息をついた。

「さすがに、まだ探しているなんて」

だが、今までのクロウの行動を考えるとその可能性は充分にありえるかもしれない。

変なところで熱血なクロウのことだから、もしかしたらまだルークが森の中に居ると信じており探し回っている。そんな姿が安易に想像できてしまう。

「別に、俺のせいじゃねーからな！」

そうだ、勝手にクロウが迷っているだけで自分には関係ない。ルークはそのことを自分に言い聞かせるかのように言つた。

そうでもない、罪悪感に苛まされそうだったからだ。しかし、ルークの意味とは関係無く頭の中には森でさ迷っているクロウの姿が浮かんでしまう。

しばらくの間は本でガマンできた、しかし次第に本の一行だけをなんども目で追うだけになってしまった。

「だー！ んだよ！」

ルークは盛大に本をカーペットが敷かれた床に叩き付けた、すると本は激しい音をたてて部屋の片隅へと姿を隠してしまった。

枕に顔を埋めクロウのことを忘れようと努力する、しかしそうやってなんとか忘れようとするほどにクロウのことが頭に思い浮かんでしまう。

「俺は関係ねーぞ……」

呟いた言葉はずいぶんと儚いものだった、まるで自分のせいでクロウが返ってこないかのようにで気に入らない。

そもそも、近衛騎士のくせに主を追うことが出来ないのが悪い。だから自分は悪くない、罪悪感を感じる必要など一切無いのだとなんとも言い聞かせる。

しかし、クロウを無理矢理追い払ったのは紛れも無くルークだった。

「こんなことになるなんて想像でつきかよ」

まさか、こんな時間まで探しているなど予想できるわけがない。しかし、やってしまったのは事実としてルークに重く押し掛かってくる。

いい加減もどかしくなかったルークは、枕に埋めた顔を上げ自らの部屋のドアを力強く開けた。

「俺のせいじゃねーからな、俺は仕方なくやるだけだ！」

ルークはまだそうやって自分に言い聞かせた、まったくこれほどまでツンデレの見本になる人物がこの世界に居るだろうか。

どうにも収まらない怒りを抱えながらルークは薄暗い森の中へと入っていった。

森の中はひんやりとしており、今にでも何かが出そうな気配があった。

今にも帰ってしまいたい衝動を抑え、ルークは森の奥深くへと入っていく。普段見慣れている森もこんな夜に訪れるものではない、ルークは心底そう感じた。

こんな森の中、ずっと居られるなんてずいぶんと度胸があるものだけだ。一瞬クロウのことをすごいと思ってしまったが、首を何度も振りそんな考えを消す。

「おーい！ クロウ！ どこにいったよー！」

しかし、ルークの声は森の中に響くだけでクロウの返答は無い。この辺には居ないのかとルークはため息をついてさらに森の奥深くへと歩くことにした。

だがどれだけ歩こうと、どれだけ叫ぼうとクロウは一向に現れる気配は無い。

「まったく、どこにいったよ……っ！ ぬおおおおっ！」

ルークは凄まじい悲鳴を上げながら斜面を転がり落ちた、地面に身体を叩きつけられる痛みにルークは微かな悲鳴をあげた。

どうやら小さな崖があったらしく前をよく見ていなかったルークはギャグのように見事に崖から滑り落ちてしまったらしい。

「つつうう……！」

たいした高さの崖ではなかったようで、かすり傷などは無い。しかし、それでもずいぶんと衝撃だけはありルークはすぐには立てなかった。

その時だった、嫌な音が聞こえたのは。それはたしかに野獣のようなうめき声、暗闇に光る目、そして全てを引き裂いてしまいそうな鋭い爪。

月光によつて映し出されたのは、この森に生息する小動物だった。しかし、それは何時にもまして殺気をおび普段は見せない恐ろしさを感じさせた。

「グルウウウウウウウウウウウウウウウウ……ッ！」
「な、なんだこいつ！」

普段は可愛い動物も、こうやって夜に見ると一段と恐ろしく感じる。それは夜という闇が支配する空間だからか、それとも本当にこの動物が凶暴化しているからだろうか。

その時、嫌なタイミングでガイの言っていたことを思い出した。この時期、森の動物は発情期で凶暴化していると。

「おいおい、マジかよ！」

此処はきつとこの動物の縄張りだったのだろうか、つまりそこに勝手に侵入した自分は敵なのだろう。

ルークは本能的に逃げようと考えたのか立とうとした、けれど足に痛みを感じ再びその場に崩れ落ちてしまった。

「くそ！ こんな時に……ッ！」

なんとかしなければと考えるが、回りには自分を守るものが一切無い。剣は部屋にあるし回りには木の枝しか見当たらない、それも簡単に折れてしまいそうなほど頼りないもの。

このままこんな動物に襲われるなどルークのプライドが許さない、しかし足が痛いまま逃げてもすぐに追い抜かれてしまう、そもそも快調の時ですら自然の動物には人は叶わないもの。

手と知能を与えられた人間が、それを使わず他のもので勝負すること自体が間違っているのだ。

「グルルルル……ガウアアアアアアアアアア！！！」

動物の雄たけびと共に動物が地面をけるのが分かった、それはたしかに自分の方へと向かってくる。

「ッ……！」

もう覚悟を決めるしかない、そう考えた瞬間のことだった。

「はあああ！」

視界に黒い何かが飛び込んできたかと思うと、動物の断絶魔と共に肉を切る音が聞こえた。それがあまりにも一瞬のことで理解できない。

しかしその次の瞬間、顔に生暖かい水のようなものが掛かった。何かと思い手でふき取ると、それは不気味なほど赤黒い血だった。

「ひっ——！」

今まで血というものは見たことがあった、けれどそれはヴァンとの稽古の時に擦り剥いた程度の少ない量。

けれど、今この手についた血の量は想像以上。それはとてつもない量、信じたくないけれどそれは死を意味するものなのだろう。

その時、きつとこの動物に死を与えただろう人物がルークに振り返った。

「大丈夫ですか、ルーク様？」

それは、夜という世界を支配する闇と同じ色の髪をした青年。ル

ークが捜し求めたクロウの姿だった。

「なんで……」

「見失ってしまい申し訳ありませんでした、さあどうぞ」

クロウが手を差し出す、しかしルークはその手を掴むことが出来なかった。動物の返り血がクロウの手袋を染め、もう一方の手にはルークの身長ほどあるだろう大剣を握り締めている。

銀色に煌く刃には、その存在を主張するかのように赤い血がびっしりとこびりついていた。それだからだろうか、クロウがこんなにも恐ろしく思えたのは。

「……っ！」

「ルーク様？」

クロウの手を握りたくなかった、血で汚れてしまうという心配もあったが、何より恐ろしかった。

今自分に差し伸べられている手が、さっきまで生きていた動物をただの肉の塊に変えた手だということが恐ろしく怖い。

「あ……」

ルークが何を嫌がっているのかに気付いたクロウは口を小さく動かし何かを唱えた、するとクロウとルークの回りに譜陣が現れ光に包まれたかと思うと二人の身体からは返り血が消えていた。

「今のは……」

「洗淨の譜術です。それでもう大丈夫ですか？」

たしかに幾分にかはましになった、けれどやはり怖いと感じたの

は変わらない。いくら血を消しても先ほど動物を殺したということには変わらないのだから。

「ルーク様っ！」

「な、なんだよ」

「足首がはれております！　今すぐ治癒術を！」

クロウはあわてながらルークに近付き、すぐに呪文を唱える。するとクロウの手から光があふれ出し、ルークは足が楽になっていくのが分かった。

あっという間に、ルークの足は森に入る前のように軽くなってしまった。こうして治癒術をかけてもらうのは初めてだったせいかな、とても不思議な気分だった。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ……」

「そうですか……よかったです」

クロウが一瞬見せた安堵の顔は、先ほどの命を奪ったクロウの顔とは似ても似つかないほど優しく穏やかなものだった。

その意外な表情のせいで、ルークはクロウへの対応に困ってしまった。先ほどのまま恐ろしいと感じられたならばすぐにクロウを突き飛ばして屋敷へ逃げる事が出来ただろう。

けれど、クロウが見せた一瞬の顔のせいでそれが出来ない。動物を殺した手と今自分を癒した手が同じものとは思えない。

「な、なんで……」

すると、突然雨がふってきた。そういえば今日は予言で夜に雨が降ると詠まれていたことを思い出す。

雨というのはあつというまに身体の体温を奪っていくものだ、なんとか雨を庇えないかとルークは周囲を探したが、傘の代わりになるようなものは無かった。

「ルーク様、こちらです」

クロウはルークの手をひっぱり、ルークがついてこれるよう少々ゆっくりめに走り出した。すると、クロウが導く先には雨宿りには丁度よさそうな洞窟があった。

すぐにそこに駆け込むと、ルークは雨を振り払うように身体を振るわせた。やはり少し雨の中を走ったせいか濡れてしまい、身体に冷たい衣服がまとわりつく。

「酷い雨ですね、これでは第五音素も使えないか……」

叩きつけるような酷い雨を見ながらクロウは呟いた。

「ですが、これは通り雨だと詠まれていますので安心してくだ、さ……い……?」

クロウがルークを安心させようと話はじめて時、ルークの様子がおかしかった。そして、それがクロウのもっている大剣のせいだと気付いたクロウはすぐにそれを柄へとしまった。

「剣が怖いですか?」

「っ!」

小さな声で囁きかけるようなクロウの声に、ルークは身体を振るわせた。

ルークも剣は見慣れていたし、なによりルークも剣を使いヴァン

から稽古を受けていた。けれど、先ほどクロウが持っていた剣は同じ鋼で出来ているはずなのに嫌悪感を隠せない。

「すみません、私の不注意で」

「俺は、俺は剣が怖いわけじゃねーよ！」

それが強がりだということはクロウにも分かった、何故ならルークが震えていたのだ。それは降り注ぐ雨のせいではなく、純粋な恐怖感。

「怖くて当然だと思います」

その恐怖を少しでもやわらげようとしたのか、クロウはルークの肩に手を乗せた。

「怖くなんか……」

「私は恐怖感を羨ましく思います、それをさらけ出すことはとても人間らしい」

それは、まるで慰めるかのようにとても優しく穏やかな声だった。

「私は騎士です、だから恐怖感などは持ち合わせることが出来ない。けれどルーク様は違います、恐怖を感じれるということは喜びも感じられるということ。だから、怖いのなら言ってください。それを嘲笑うものになど何かを感じる資格など無いのですから。だから誇りを持ってください、何かを感じられるということを」

もしかしたら、それはクロウの悲鳴だったのかもしれない。何も感じることの出来ない、クロウの僅かならかの悲鳴。

そしてクロウが得られないものを得ているルークを羨ましがって

いる。そんなクロウのメッセージかもしれない。

「……そりゃ剣は怖いよ、でもそれじゃなんか」

「いいのです怖くて、剣など本来ならば無い方がいい」

それは剣を使い戦うことが職業の騎士が発言するには、あまりにも似つかわしくない言葉だ。けれど、それが彼——クロウの本心なのだろう。

すると、クロウはルークに向き合った。その顔はとても申し訳なさそうな顔だった。

「先ほどはすみません、ですが私はルーク様の騎士。ルーク様を守るために私はまた命を奪うことになるでしょう」

「あの動物みたいにか？」

「はい、もしかしたら今度は動物ではなく人かもしれない。ですが、ルーク様を守る為でしたら……」

クロウは不安そうなルークを見てさらに続けた。

「私がルーク様をお守りします。ですから、もしかしたら私はまたルーク様に血を見せることがあるかもしれない。それをご理解くださいませ」

「それって、いつだ？ お前が俺に血を見せることになるのって」

「それは私にも分かりかねます、けれどそれは絶対に近いでしょう」

ルークは再び大剣を見た、この大剣が何れ人の命を奪っていく。それを見ることになるかもしれない。

「そんなの、嫌だ……っ！」

「ルーク様？」

「俺は、誰かが目の前で殺されるのなんて見たくねえ……っ！」

その悲鳴は、あまりにも小さく悲しいものだった。

けれど、これは普通の反応だろう。ルークは軍人でもなければ戦うことを強制される側の人間ではないのだから。何より、誰だって殺されるところを見たくない。

「ならば、私に命令してください」

「え？」

「ルーク様は私の主です。ルーク様の命令は絶対、だから私に命じてください。誰も殺すな……と。絶対にとはいきませんが、私は出来る限りそれをお守りしましょう」

すると、クロウはルークの前に跪いた。

「な、なんだよ！」

「我が主、ルーク・フォン・ファブレ様。どうか私に命じてください」

そんなクロウの姿を見てルークは一瞬ためらった、此处で命令すれば自分はこの青年を自分の騎士として認めてしまいそうで。

けれど、もう二度とあんなところは見たくない。そんな衝動がルークの口を動かした。

「クロウ、俺の目の前で人を殺すな……これでいいかよ」

クロウが跪いていることな何故かくすぐたくて、ルークはすぐに視線をそらした。するとクロウは顔を上げ、普段は見せない笑顔を見せた。

「承知いたしました、ルーク様」

「ふん……」

どうも、こういったものはなれない。あらためてそう感じた。

「そういえば、初めて名前を呼んでくださいましたね」
「な……っ！」

クロウのからかうような言葉にルークは自分の髪のように頬を赤く染めた、一瞬隙も見逃さないクロウが憎らしくルークは再びクロウへ罵倒を浴びせた。

しかし、クロウもそんなルークのむきになった言葉に笑みをこぼしながらその罵倒に応えていた。

ルークの心が晴れたのと同時に、空も綺麗に晴れ渡っていた。

第5話「イタズラ」 後編

暗い森の中に、一際輝く何かがあった。それはクロウの手より発せられる第五音素の譜術だった。

「暗いですが、大丈夫ですか？」

「これくらいなんともねえよ」

暗闇とまではいかないが、空に浮かぶ月とクロウの譜術だけではどうもたよりない。

だが、そんな暗い道でもクロウはルークの手をひき屋敷の方向へとたしかに導いていく。それは、月や譜術よりもルークにとっては頼もしいものだった。

やがて、屋敷のものだろうと思える光が見えた。その光が近付いていくのと同時に、使用人たちのルークとクロウを捜し求める声が聞こえ始めた。

「げえ、やっぱり探してんのかよ……」

「さて、どうしますか。ルーク様は森で迷っていたわけではないんですよね？」

「な、なんでそれ！」

クロウが自分のしたイタズラに気付いたことが意外だったのか、ルークは一瞬立ち止まってしまった。

「服が汚れていませんでしたので、既にお屋敷にお戻りだったのですね。気付けなくて申し訳ありません」

しかし、それがルークのイタズラだったとは気付いていないよう

だった。それが何故か心苦しく、ルークは顔を顰めた。

「心配してくださったのですか？」

「はあ?! 何言ってるんだよ!」

「再び森に戻ってきてくださるということは、心配してくださったのかと思ひまして」

「ち、ちげえよ! 俺はただ……散歩のつもりで……」

次第に声が小さくなっていき嘘がバレバレなルークを愛らしいと思ったのか、クロウはかすかに微笑んだ。

「こんな夜に、セシルにも言わないで……ですか？」

「わ、悪いかよ!」

「ふむ、ルーク様は嘘が苦手ですか。その場合私がフォローしなければなりませんね」

ルークは一瞬怒ろうとしたが、不思議と笑みが溢れた。初めてかもしれない、クロウが人間らしく笑ったり冗談を言ったりするのは。

「ルーク様! どこですかー!」

屋敷に近付くと、メイドたちの声はつきりと聞こえるようになってきた。

クロウだけならまだしも、ルークもいなくなったとなればさすがに屋敷中が大騒ぎになっていた。一瞬ルークはあの場に戻りたくないと感じたがいつまでもこのぬかるんだ森にも居たくない。

仕方なく、屋敷のほうにあしを進める。すると、森からクロウとルークが出てくるのを見たメイドは驚きの声を上げ、すぐに仲間を呼んだ。

「ルーク様、ご無事ですか?!」

すぐにメイドが持っていたタオルでルークの髪の毛を拭き始めた、雨のせいではないかと濡れていたせいか、ふかふかのタオルが気持ちい。

すると、メイドたちの話を聞いたのかガイがやってきた。

「ルーク! 大丈夫か?」

「たりめーだろ、あんな森の中でくたばってたまるかってーの」
「そういうことじゃない、なんで夜に森に入ったんだ」

ガイの責めるような視線をうけて、一瞬黙ったルークは僅かに口を開きかけた。けれどその前に、クロウがガイに向かって、正しくはメイドたちにもむかって謝罪を示すように頭を下げた。

「本当に申し訳ありませんでした、既に屋敷に戻っておられると知らず私が森を遅くまで搜索していたばかりに。ルーク様は、私を探してきてくれたのです」

「そうなのか、ルーク?」

「それは……」

「ルーク様」

すると、突然クロウはルークの前に跪いた。

「ルーク様を護衛出来ず、さらには目を離してしまい申し訳ございません。ですが、ルーク様が私を探しにきてくださったこと、心よりうれしく思います」

「んなの、べつに感謝されるほどのもんじゃねーよ」

どうもクロウに感謝されるのは苦手だ、感謝されることよりも、

その行動が苦手なのだろうが。

すると、ガイはルークからクロウに視線を移し暗い顔で頷いた。

「じゃあ、本当にルークは……」

「はい、私のせいです。本当に申し訳ございません、今後このようなことが無いように努力いたします」

「本当にそうしてもらいたいもんだな、昨日はあれだけ自身満々だったが実際はこんなに役に立たない奴はどは思ってもなかったよ」

ガイのあまりにも冷たい言葉に驚いたルークはガイの服のすそを掴み迫るように言った。

「おい、ガイ……っ！」

「事実だ、主を見失う近衛騎士が何処に居る」

「そのとおりです、ルーク様。今回の私はあまりにも無様です、セシルの言うことは正しいです」

そのガイの嫌味を安易に肯定するクロウにルークは複雑な気持ちになった、元はルークが自分の意思でクロウを森においてきたのだから責められるべきは自分のはず。

たしかに、見失ってしまったクロウも悪いのかもしれないが自分にも原因がある。けれど、クロウはそれを言うことを許さない雰囲気だった。

「ルーク様、そのままではお体が冷えます。すぐに暖めなければ」

クロウがそう言うのとメイドたちはすぐにルークの手を引きファブレ公爵ご自慢の巨大な浴室へと導こうとした。ルークも寒いままは嫌なので、クロウも気になるが行こうとした。

そして、ルークがクロウから視線を外した、その時のことだった。

「――クロウッ！」

ガイの声と共に、クロウはその場に倒れこんでしまった。

「ッ……！ す、すみません。少々眩暈がしたもので」

クロウは立とうとするがすぐによろけて地面に手を付いてしまう、その顔には先ほどは見当たらなかった汗が浮かんでいた。

「クロウ……？」

「なんでも、ありません……ルーク、さ……ま」

ルークの心配を和らげようとクロウは笑顔で答えようとした、けれどクロウはルークの名前を呼ぶと同時にその場に倒れてしまったのだ。

「すごい熱だ……誰か医者を！」

倒れこんだクロウに駆け寄ったガイは額に手を当ててすぐにメイドたちへ叫んだ、するとメイドたちはすぐに医者呼びにいった。その風景をルークはただ見ていることしか出来ない、何故だろうかルークの心にはしきりに罪悪感が溢れた。

「おい、クロウ大丈夫なのかよ」

「心配するな、昼間も雨が降っていたからそれで風邪を引いただけだろう。それよりお前も風邪を引かないように早く風呂に入ってこい」

ガイに言われると、ルークはそのままメイドに導かれ浴室へと向

かった。後ろ髪を引かれたが今あそこに居たって何かすることがあるだろうか。

それよりも今は、心に押し掛かる罪悪感をなんとかしたい思いでいっぱいだった。

風呂から上がってきてから聞かされたのは、クロウのことだった。どうやらそうとう無理をしていたらしく、ここまでルークを送ってこれた気力があつたとは医者も驚いていたようだった。それほどクロウの意識は飛ぶ寸前だったらしい。

ルークはクロウが心配になりクロウの部屋の前に立っていた、ガイにはお前が気にすることじゃないと言われたが、やはり気になつてしまう。

何より、心の中にある罪悪感をクロウと話せばなんとかなるかもしれないと思つたからだ。

「入るぞ」

数回ノックをして少々荒っぽくドアを開ける、すると質素なベッドで上半身を起こしているクロウの姿が見えた。

「ルーク様?! どうなさいました?」

ルークの訪問に驚きを隠せないのか、クロウの声は少々腑抜けた声になっていた。

しかし、ルークの顔が真剣そのものだということを感じたつたクロウはすぐに真面目な表情になった。すると、ルークはクロウの近くへと歩く。

「……」
「……」

だが、何から話せばいいのか分からない。

沈黙がその場に流れルークは俯き何から話せばいいのか考えた。
本当は決め手いたはずなのに、いざクロウを目の前になると何も言葉が出ない。

「そ、その……風邪の方は大丈夫なのかよ」

「え……あ、はい。先ほど治療術を施したので、もう大丈夫です」

「そっか……」

すると、再び沈黙してしまった。なんとも言いがたい空気が流れ、ルークは何かを言おうと口を鰹のようにパクパクさせるが何も言葉が出てこない。

「ルーク様は、もう足の方は無事なのですか？」

その沈黙をやぶったのはクロウだった。

「足……？ ああ、大丈夫だ」

「そうですか、よかったです。本当にすみませんでした、ルーク様から目を離さなければあのようなことには……」

本日何回目だろう、クロウの謝罪を聞くのは。そして、その度に膨れ上がっていく罪悪感となんともいえないこの思い。

それに耐え切れなくなつてか、ルークは少々乱暴に喋った。

「なんでさつきから謝ってばかりなんだよ……ッ！」

「え……？」

「さつきからずっと『申し訳ありません』とか『すみませんでした』とか！ お前だって気付いてんだろ？ 俺がお前を森にわざと置いていったってこと！」

さつきから感じていた罪悪感の正体はこれだった、一番最初の原因は自分なはずなのにクロウばかり誤り自分は被害者になっている。それがどうも後ろめたくて、けれどプライドの高いルークが近衛騎士ごときに、しかも気に入らないやつのために謝ることなど選択肢にはない。

だから溜まってしまった不満が、今こうして爆発した。

「ええ、知っておりますよ……」

「だったら、なんで謝るんだよ！ 悪いのは……俺じゃ！」

「悪いのは私です、ルーク様」

「情けかよ？ 言っておくけど俺はそんなもん求めちゃいな……ッ！」

「いいえ、私が悪いのです。私は近衛騎士のくせにルーク様の信頼を得ることも出来ず、ルーク様を苛つかせ精神的に疲れさせてしまっただけです」

そのクロウの言葉は情けなどではなく、本当に申し訳ないと思っているものだった。

「ルーク様が私にイタズラしたのは、私が気に入らなかったから。けれど、その原因を作ったのは私です。私は騎士として大切なことを忘れてしまっていたのですから」

「大切なこと？」

「騎士とは主を守るもの、けれど私には守ることが出来なかった」

「守るって、出来てるじゃねえか…… 実際助けられたんだし」

すると、クロウは否定を示すように首を横にふった。

「たしかに肉体的にはあなたを守れました。けれど私は貴方を精神的には守ることが出来なかった」

そう言うところクロウは自らの大剣に視線を向け、ゆっくりと口を開いた。

「肉体とは心があつてこそそのもの、だから私は貴方の心も守らなくてはならない。けれど私は貴方の目の前で命を殺めてしまった。ルーク様はその時言いました、死など見たくない。そんなことにも私は気付けなかった！」

その後悔の言葉は、あまりにも痛々しいものだった。クロウは悔いるように布団を握り締め、歯を噛み締めた。

「その時、気づいたんです。これではルーク様を守っていることにはならないと」

「……クロウ」

「私は今まで護衛と言いながらルーク様を精神的に追い詰めてしまった。愚かなものですね、守るべき立場のものがルーク様を傷付けていたなんて……」

すると、クロウはルークの手を掴み微笑んだ。

「軟禁生活とは窮屈なもの、それを私のせいでさらに苦しくさせてしまい申し訳ありません。今再び謝罪を……」

「よ、よせー！」

ルークはなんだか恥ずかしくなつてクロウの手を振り切つた、そして失礼かもしれないと思いながらクロウに人差し指をさした。

「さつきから聞いてりや！ ウジウジしやがつて、俺の近衛騎士だつたらもつとしやつきとしやがれ！ それとお前がウジゝつてしてんの正直ウゼエ！」

「ルーク様……？」

「俺の近衛騎士ならなあ！ もつと堂々としろつてんだ！ それが出来ないなら俺は絶対にお前と騎士の誓いなんかしねえぞ！」

そのルークの言葉は、乱暴だつたがとても優しいものだった。プライドが邪魔してかこんな乱暴な言葉だが、ルークなりにクロウを励まそうとしている。

そんなルークの気持ちがクロウにはしっかりと伝わっていた、だからだろうかクロウが笑つたのは。

「あはははは……っ」

「な、なんだよ！ 何がおかしいってんだ！」

「いえ、なんだかルーク様が私を励ましてくださるなんて思わなかつたので」

「ち、ちげえよ！ 俺はただウジウジしてるやつを近衛騎士にしたくないだけでああ！」

ルークは必死に今のは励ましではないと主張するが、それが無理矢理なのは誰が見ても一目瞭然だった。

すると、クロウは優しい笑みを浮かべルークに語りかけた。

「それでも、うれしいです。ありがとうございます」

それが優しいせいか、ルークはともくすぐったいような気持ちになった。

いままで謝罪の言葉しか出さなかったクロウが言った言葉。その言葉は感謝を意味する『ありがとう』という優しく温かいものだ。そのせいか、ルークはどうもクロウの顔を直接見るのが恥ずかしくなった。こうやってお礼を言われたのは初めてだったから。

「うるせえ……」

「そうですね、言葉が過ぎたかもしれません。ルーク様、もう夜も遅いですしお部屋にお戻りになっては？　ここに居ると風邪がうつってしまいます」

「げ！　もう11時かよ！」

ルークは自分の部屋に帰ろうとドアへと歩いていく、そこで何かを思い出したのかポケットの中を探った。すると、中から何かを取り出しクロウに投げた。

「これは？」

クロウに投げられたものはペンダントだった、美しく装飾されたふちにルークの髪の色によく似た赤い宝石が埋め込まれている。

「それやる、なんか病気が治るとか……」

「いいのですか、とても綺麗なのに貰ってしまって」

「俺がやるって言ったらやるんだよ！」

「……そうですか、ありがとうございます」

クロウの顔を見なくても伝わってくる幸せな思い、それがくすぐたくてルークはあたまをかいいた。

フォンジユエー

「これは音素宝石ですね」

「なんだそれ？」

「音素をためることが出来る宝石です、これには僅かですが第七音素が溜まっておりますね」

すると、クロウはそれを握り締めた。その顔には蔓延の笑みを浮かべている。

「本当に、ありがとうございます」

「ふん、もう寝るからな！」

「お休みなさいませ、ルーク様」

激しい音を立ててルークはクロウの部屋から出ていった、そしてもう一度クロウの部屋を見る。

「悪い奴じゃないよな……」

そう呟き先ほどの言葉を思い出す、何故だろうかこんなにも心があつたかくなるのは。こんなに幸福感を得られるのはヴァン師匠が稽古をつけてくれたり褒めたりしてくれるときだけだ。

なんだか、クロウを騎士に認めてやってもいいかもしれない。そんな考えがルークの中で芽生えつつあったのはルーク本人も知らない。

部屋でルークに渡された音素宝石をクロウはずっと眺めていた。

「主から何かを貰うことがこれほど嬉しいとは、そうは思いませんか？ ガイ・セシル」

「気配は消してたつもりなんだけどなあ」

すると、窓の外からガイがひょっこりと顔を出した。先ほどからずっと聞いていたのか少々寒そうだった。

「それで気配を消しているつもりとは、私には感じ取ってくれと言わんばかりに気配が伝わってきましたよ」

「それは手厳しいな」

「何か御用ですか？ 出来ればもう眠ってしまいたいのですが」

「もうルークが帰ったことが確認できたからいいよ、それじゃあお休みなさい。そのまま永遠に寝ちまえ」

そう呟いたガイの表情はとても暗く、普段ルークに見せるものはまったく違っていた。

ガイは自分の部屋への道に行く途中、あの近衛騎士に恨みを募らせていた。

今回のことは本当に安心した、ルークが死んでなどいたらガイが此処に来た意味が無くなってしまふのだから。

あの屑が少しでもミスっていれば、ガイの復讐は永遠に果たされないまま終わっていただろう。

「ルークを殺すのは、俺の役目だ……っ！」

それは復讐者の目だった。

第6話「届かぬ優しさ」

昨日の天気とは打って変わって、久しぶりの晴天になった今日はルークが何よりも楽しみにしている日でもあった。

そのせいか、今日のルークは朝からそわそわしてどうも落ち着きが無い。今か今かと自分の部屋のドアの前で誰かを待っている。

「早くこねえかな……っ」

ルークはソファアに座りながら足をぶらぶらさせている、そしてまるで何かに取り付かれているかのようにずっとドアを見ている。

隣に座っているクロウは不思議そうにルークを見ていた、先ほどからソファアの前の机を蹴飛ばしそうなのを注意してもまったく聞いてはいない。

「ルーク様、いったい誰をお待ちになられているのですか？」

こんなにもルークの心をわしづかみする人間がいったいどんな者なのか気になったクロウはたまらずルークに聞いた。

すると、先ほどから何を言っても聞かなかったルークが振り向き目を輝かせて言った。

「そんなのヴァン師匠に決まってるんだろ！」

「ヴァン師匠？ いったい何をルーク様に教えているのですか」

「剣術だよ、ヴァン師匠ってマジですげーんだぜ！ 絶対にクロウでも敵わねえくらい！」

そう言われてクロウはむっとした、正直剣術だけならば誰より自身はあるし負ける気がしない。けれど、ルークがここまで褒め称え

るには何かあるのかもしれない。

「ずいぶんと慕っておられるようですが、ヴァン師匠とはいったいどんなお方なのですか？」

「ヴァン師匠はな、強くてカッコイイんだぜ！ 俺、絶対将来はヴァン師匠みてえに強くなつてやる！」

たしかにルークぐらいの年齢ならば強さに憧れるのも無理は無い、幼い頃は強さはずいぶんと魅力的なものなのだから。
けれど、ルークは優しい笑みで続けた。

「それに、俺と本気で接してくれる大人は、ヴァン師匠だけなんだ」
「そうですか？ ファブレ公爵様もルーク様には本気で接しておられますし、シュザンヌ様も……」

「父上と母上が俺に本気？ んなこと、あるわけねえだろ……」

一瞬、ルークの顔が暗くなりましたと思った。けれどそれが地雷だったというわけではなかったらしく、ルークはそのまま話を続けた。

「父上は無関心だし、母上は褒めてはくれるけど情けって感じだし。でも……ヴァン師匠は違う。ちゃんと俺のことを褒めてくれる、それに叱ってだつてくれる、俺が記憶喪失で知らないことも馬鹿にせずに教えてくれる、俺が辛かったりすれば一番最初に気付いてくれるのはヴァン師匠だった」

「だから、ヴァンは特別だと？」

「ああ、だからヴァン師匠が父親だつたらって何度も考えた……父上なんて、俺のことなんにも考えてくれねえんだからよ！」

ルークのその目は、とても悲しげなものだった。自分をまったく

見てくれない父親、そして皮肉なことに一番自分を見てくれているのはヴァン師匠。

ヴァンが父親ならばどれだけのすばらしいことだったか、そんな悲しみと父親に対する憎しみ。何故、自分のことを見てくれないのかと。

「ルーク様、それは違います。ファブレ公爵様はルーク様が心配だからこそ私を騎士に……」

「でも、父上は俺の話は一切聞かなかった。あんなの優しいなんていえるかよ！ あんなの、絶対に……」

そのあまりにも悲しそうな顔をクロウは見ていらなかった、ルークが悲しそうだからという理由もあるが、ファブレ公爵のあまりにも不器用な愛仕方、それを知ってしまったているから。

クロウは、その時のことをふいに思い出した。それはクロウが始めてこのファブレ公爵邸にやってきた日のことだった。

それは、突然の呼び出しだった。

騎士として最高の地位として有名な白光騎士団、それに入るためにはいったいどれだけの訓練を実績が必要なのかは誰もが知っていた。

そんな騎士としての栄光の場所に、僅か16歳の少年クロウ・レイウォルトは呼ばれたのだった。

「失礼の無いようにしなさい」

バチカルには珍しい黒髪の男は、自分の息子であるクロウに語りかけた。

「分かっております、お父様」

そして、実の父親の問いにあまりにも素っ気無く、まるで機械のように反応するクロウはただファブレ公爵邸を見つめていた。

この少年の実力は確かなものだとも誰かが知っており、藍より青しとはよく言ったもので、今ではレイウォルト家の中では既に師匠である父親をも追い抜いていた。

しかし、いくら強くても少年は白光騎士団に入るには幼く、また経験も足りない子供だった。そんな子供が何故ファブレ公爵直々の手紙をもらい呼ばれたのか。

本来ならば厳しい訓練と試験を受けなければならいはずなのだ。

「レイウォルト様ですね、どうぞこちらに」

白光騎士団に守られた門から一人の執事が現れた、執事は丁重な仕草でまだ幼いクロウを王族であるファブレ公爵家の門をくぐらせた。

これがいかに光栄で誇らしいことなのか、なにより騎士として迎えられるのがどれほど名誉なことか、少年は知っているのだろうか。執事に連れられて来たのは豪華絢爛な応接間だった、その主が座るべき中央の椅子に紅き髪を持つファブレ公爵は座っていた。

「よく来てくれた、レイウォルト殿。座ってくれ」

ファブレ公爵に促されるままクロウと父親は客席についた、父親は緊張のせいか動きがぎこちなくぜんまい仕掛けのようにかくかくした滑稽な動きをした。

しかし、それに対してクロウは無表情のまま一切動じず席にいた。肝が据わっているように思えたが、子供故の愚かさか目の前にいる人間がいたい誰なのかを理解していないようだった。

きつとクロウにとっては目の前にいる人間と下界の人間も同じ『大人の男』でしかないのだろう。とは言うものの、クロウは子供といえど16歳なのだからこの意味くらい理解していてもよさそうな年齢だった。

「16歳、若くもあるが精神的には大人に近いものだろう」

だから、ファブレ公爵は少々クロウの行動が理解できなかった。まるで人形のような、まったく感情の無い少年が。

最近一段と騒がしくなってきた息子に是非とも覚えさせたいものだ、たまにはこうやって一時間ほど静かにしていると。

「クロウ、今回君が呼ばれた理由は理解しているか？」

ファブレ公爵の問いにクロウは一瞬も迷わず言葉を発した。

「ファブレ公爵様のご子息、第三位王位継承者ルーク・フォン・ファブレ様の護衛と伺っております」

「それでは、自分が白光騎士団に入るということも承知しているわけだな」

「はい、もちろんでございます」

その力強い言葉は、いままでの印象はまったく違っていた。

さつきまでは、ただ仕方なくやっているという印象しかなかったのだが今回は違う。それははっきりと意思を持つものだった。

「そうか、それではさっそく……」

「あ、あの……」

ファブレ公爵がクロウを騎士として認めようとした時、父親がそれに静止をかけた。

「どうされたのか？ レイウォルト伯爵」

「お言葉ですが、本当にクロウでよろしいのでしょうか？」

レイウォルト伯爵は、とても不安そうに言った。本来ならば我が子が白光騎士団に入るのだから静止などせず、むしろ喜ぶべきところだというのに。

「たしかにクロウはとても強いですが、さすがルーク様の騎士となるのはまだ早いかと」

「何故、そう思う？ キムラス力では16で職に就くものも多い、なによりクロウの力は貴殿の方が一番知っているのではないか？」

「はあ……たしかにクロウはとても強いですが、しかし、何故クロウなのですか？ 他に経験が豊富で強い騎士などいくらでもいるのでは？」

たしかに、クロウは強いといっても白光騎士団の中では中の下といたところだろう。クロウ以上に強く頼りがいのある人間ならいくらでもいるはずだ。

第三位王位継承者で王になることを保障されているルークの近衛騎士となればクロウでは適任ではないと言いたいレイウォルト伯爵の気持ちも分らないではない。

そして同時に、ルークの騎士ならばこの国に居るほとんどの騎士がなりたいた願うだろう。それが一番の名誉であり栄光なのだから。

「たしかに、他にいくらでも騎士は居る。だが……クロウ・レイウ

オルト、君でなくてはならないんだよ」

そう語るファブレ公爵の瞳はとても悲しそうで、そしてとても優しい瞳だった。

「クロウ、君には予言が無いと聞いている」

「ファブレ公爵様！ な、なぜそれを……っ！」

ファブレ公爵の言葉に驚いたレイウオルト伯爵は、机を叩き立ち上がった。それは、レイウオルト伯爵にとって何よりも知られてはならないことだったのだから。

これから咎められるのかと身体を震わすが、ファブレ公爵はおちつけと促し、敵意がないことを主張した。

「私は貴殿を責めるつもりはない、ただ予言に縛られない人間が欲しいだけなのだ。それは予言どおりに生きているか、信仰心があるかではない。絶対的に予言に縛られぬ者、つまり予言のないものが必要なのだ」

「それが、私の息子だと……しかし、何故そのような者を求めるのですか？」

レイウオルト伯爵の言葉にファブレ公爵は一瞬黙った、しかし悲しい笑みを浮かべるとゆっくり話し出した。

「私の息子、ルークのことなのだが。ルークは何れ予言によって殺されてしまう」

それは、自分の息子を助けたいと願う父親の言葉だった。

「秘予言には、二年後に私の息子の命との引き替えに栄光が訪れる

と詠まれている」

「そ、それは……」

「だが、私はその予言に抗ってはならない立場だ」

もしも、これが普通の一般階級の人間であれば予言に抗うことも許されただろう。しかし、彼は……目の前に居る父親は第二位王位継承者である。

それはとても名誉であると同時に、責任というものがある。そう、このキムラスカ・ランバルディア王国を栄光へと導く責任が。

だからこそ、彼には自分の息子の命を引き替えにしても予言を死守し栄光を手に入れなければならない。

「私には、我が子を守ることすら叶わないのだ」

それは、自分の息子を守ることが許されない。哀れな父親の微かな悲鳴だった。

「だから、微かな希望を抱きたいのだ。もしかしたら、予言に縛られぬ存在がルークを救ってくれるのではないのかと」

それは本当に微かな希望だった、いくら予言が無いからと言ってルークを予言から開放することが出来る確信はまったく無い。

けれど、ファブレ公爵には、哀れな地位の父親にはそれしか期待できるものが無いのだろう。

「ファブレ公爵様」

その時、クロウはファブレ公爵の前に跪いた。

「公爵様の願い、しかと聞きつけました。クロウ・レイウォルト、

レイウオルト家の名に懸けてルーク様を必ず助け出してみせます」

ファブレ公爵を見上げたその目は、たしかに騎士としての覚悟が宿っていた。

「そうか、とても頼もしい……」

「ファブレ様、必ず私がルーク様をお守りいたします」

それは年相当とはとてもいえないが、それでも信頼させる頼もしい声だった。

だからだろうか、先ほどから悲しみの表情しか見せなかったファブレ公爵の顔に、微かに笑みが映し出されたのは。クロウへの期待によるものだろう。

そこまで思い出して、クロウは考えるのを止めた。我ながら客観的な記憶に少々苦笑しながら、ファブレ公爵の苦悩を感じていた。

目の前にいる赤い髪の少年は父親の愛を知らない、それはあまりにも不器用でそれをするのを許されない父親のせいなのかもしれない。

いや、それともこの地位のせいか。あまり人の心が理解できぬクロウでもなんとなくファブレ公爵の気持ちは分かった。何れ死ぬと分かっている息子に愛を注げば悲しみは膨れ上がる。

もしかしたらその予言を止めようとしてしまうかもしれない、だからせめて悲しみも執着も無いようにと無関心が続ける。それでも

やはり自分の息子だから助けたいと願う。

「何れ、ルーク様も分かる時がくるかもしれません」

そう呟いたクロウの声は、ルークには届かない。

まるで、父親のせめての優しさのように。その優しさはたしかにあるはずなのに、見えない。

すると、来客を告げるようにルークの部屋のドアがノックされた。その音にルークはすぐ反応しドアの前に立つ、するとメイドの声が聞こえた。

「ルーク様にお客様です。ヴァン様ですが、こちらに……」

「今いく、応接間にいるんだよな！」

メイドの言葉を遮りルークはまさに風のように部屋から抜け出してしまった。そのあまりにもの速さに少々クロウは感激し、すぐにその後を追おうとした。

すると、ルークが出て行くさい机にぶつかり何かを落としたことに気が付いた。クロウは床に落ちた本を拾うと、その表紙には小さな文字で日記帳と書かれていた。

「これは、ルーク様の日記？」

失礼と思いながらも、すでに開いてしまったページを覗く。すると、そこには日付を数行の文字が並んでいた。それはどれも短く同じ内容のものであった。

レムガーデン 36日 シルフの日

今日も何も無い一日だった、ひさしぶりに雨がふったけど外には出るなど言われた。

風邪をひくからだって言われたけど、少しは遊んでみたい。

レムガーデン 37日 ローレライの日

今日は晴れだった、ひさしぶりに森に言ったけど土がぬかるんでた。午後はやることなく暇だった。

そこまで読んで、クロウはなんとなく申し訳ないような悲しい気持ちになった。この日記にはルークの日々が綴られているが、その全てがとても短く心苦しい。

なんども繰り返し返される同じ日々、まるでルークの一日はなんども同じ日をループしているかのようにつまらないもの。

けれど、そのページに一日だけとても詳しく書いてあるページがあった。

レムガーデン 38日 レムの日

今日はヴァン師匠がきてくれた、ひさしぶりにした稽古はすごく楽しかった。

今回は前回より腕が上がったって言われてすげー嬉しかった、でもやっぱり防御が薄いと言われた。

俺はあんまり防御はするタイプじゃねえつつたらヴァン師匠は防御のことを教えてくれた。

それがすごくためになって、明日からまたガイと一緒に防御の練習

をしようと思う。

あと、今日はヴァン師匠が泊まってくれるそうだから後で少し話したい。また旅のこととか話してくれるだろうか。

その日記は、次のページまで続いていた。その全てはヴァンと会えて嬉しいという思いが綴られており、そうとうルークはヴァンを慕っていることが伺える。

だからだろうか、ルークにここまで尊敬され信頼されているヴァンが羨ましく思え、なんとなく嫉妬した。

いや、きつとこの心は嫉妬なんて生易しいものではない。まだ見もしない相手への対抗心、必ず自分が一番の信頼に立つという決意。

「クロウ、どかしたの？」

「あ、いや……なんでもない」

メイドの声によってようやくクロウは現実に戻された、しょしょこの日記を読みすぎたかもしれない、後でルークに謝っておかなければ。

立ち上がりクロウは日記をそつと机の上に置いた、そしてルークが向かったはずの応接間へと足を運ぶ。

その先に居るはずの、まだ見もしない相手に対抗心を燃やしなから、クロウは歩いた。

第7話「対抗心」

応接間に着いた時には、すでに対抗心を燃やしていた相手にルークは笑顔で抱きついていた。

「師匠！ 今日稽古をつけてくれるんですね！」

「ああ、もちろんだ。以前に約束していたからな」

「やった！ 今日お願いしますヴァン師匠！」

ルークが尊敬するヴァンという人物を見て、クロウは驚いた。ヴァンという男は髭のせいで老いて見えるがずいぶんと若い男だったのだから。

まだ二十代の後半といったところだろうか、そんな人物がルークの師匠。それがどうも信じられなかったのだ。

「あれが……ヴァン」

クロウがかすかに呟いた言葉には、たしかに対抗心がこもっていた。というより、クロウはルークが尊敬すべき相手には誰にでも対抗心のある声だ。

それは近衛騎士としてのプライドだろうか、それにしてはずいぶんとしつこいものだということはクロウ本人も自覚していた。

だからと言って、治す気などさらさらないのだが。

「おや、そちらの騎士殿は始めてみる顔ですな」

ヴァンがこちらに気がつき近寄ってくる、さすがにルークが尊敬する人間の前で無様なことは出来ないとクロウは礼儀正しくお辞儀をした。

「始めまして、まだ正式な誓いはしておりませんがルーク様の近衛騎士クロウ・レイウォルトです」

まさに使用人の鏡といえるほどきつちりと挨拶したクロウは自身ありげにヴァンを見た。

だが、ヴァンの方はそんなことよりルークに近衛騎士がついたことに驚いていのるか、目を点にしておりクロウの自己紹介を聞いていないようだった。

「ルークの近衛騎士か、以外だな。ルークはこういったものは好いていないと思っていたのだが」

たしかに、出会い始めからルークとクロウは喧嘩同然の行為で始まり、最近ようやく少し和解したところだ。

和解したとしても、ほんの僅かなものでしかないのだが。しかし、昼間に限り部屋への立ち入りを許可されたことはクロウにとっては大きな功績だった。

「ヴァン師匠、そんなことより早く稽古しようぜ！」

しびれを切らしたのか、ルークはヴァンの服のすそを掴み中庭の方を指差す。どうやらもう待ちきれないようだ。

「ああ、そうだったな。先に行って準備をしてきなさい。私も後から行こう」

「わかりました！」

ルークは頭を下げるとすぐに自分の部屋へと走って行ってしまった、そのスピードと言ったら普段の三倍はあっただろうか。

クロウはすぐにその後を追おうとしたが、誰かの手がクロウの肩を掴み行こうとするのを阻止した。いったい誰だと振り向いてみれば、そこには先ほど弟子に見せた笑顔とはまったく違う表情のヴァンが居た。

「クロウ、君には予言が無いと聞くが」

一瞬どこでそれを聞いたと、クロウは掴みかかりたくなった。しかし、ファブレ公爵から聞いているのかもしれない。

けれど、どうやらこのヴァンという男が着ている服は信託の盾騎士団のものだ。ならば予言を厳守する人間に予言を覆す為に遣わせたクロウのことを話すだろうか。

怪しい、もしかしたらかまをかけているのかもしれないと思いクロウは曖昧な答えを言う。

「さあ、どうでしょうかね？　そもそもこの世界には予言に縛られる者だけが生息しているわけではありません」

そう言った瞬間、ヴァンはかすかに笑った。

それは嘲笑でも、優しげな笑みでも、おかしなことを笑う顔でもない。そう、ただヴァンは笑ったのだ。不気味なほど心が読めない笑顔で。

「……………っ！」

そのせいだろうか、普段何も恐れていないクロウがはつきりと恐怖を感じ取ったのは。

「この世界には予言に縛られぬ者が必要だ……そうとは思わないか？　なにせ貴様も——なのだから」

絶対に聞き逃すはずのない距離で話していたはずなのに、クロウには最後の言葉が聞こえなかった。

「え？　今、なんと？」

しかし、聞き返した時にはすでにヴァンは応接間のドアを開けていた。そしてクロウに振り返ることもなく、ルークが歩いていった道と同じ道を歩いていった。

かすかに見えたヴァンの顔には、もう先ほどの怪しい笑顔はなく、代わりに威厳のある威風堂々とした顔をまるで仮面のようにまとっていた。

クロウが中庭に来た時には、既にルークは木刀を持ちヴァンと手合わせをしていた。

木刀と木刀が触れ合う音は屋敷に響き渡り、一つのメロディーのようにすら感じられた。

そして、いつも不機嫌そうな顔をしていたルーク表情からは喜びと嬉しさ、そして楽しさが感じ取られた。

「いつも、あんなに笑顔なのですか？」

その稽古を見ていたガイに、クロウは近付き聞いてみた。すると、ガイははにかみながらクロウの問いに答える。

「ああ、ルークはヴァン謡将との稽古の時は素直だからな」

「そうなんですか……今日の様子から感じてはいましたが。そんな

に」

よほどの信頼があることが羨ましいのか、先ほどからクロウはヴァンへの視線がきつい。

周りから見れば、クロウが普段のルークと同じ表情をしているように見えるだろう。実際、それほどまでにクロウの目つきは悪いとしか言えない。

そんなクロウを見て、ガイは思わず笑ってしまった。

「本当にルークが大切なんだな」

「大切も何も、主ですから。なにしろ出会い方が出会い方でしたし、もっとルーク様の信頼を得たいと思うのは当然のことかと」

「だとしても、その執着は異常だと思うけどな。それに……ヴァン謡將のことに關しちや諦めた方がいいと思うぞ？」

その言葉に、クロウの視線はヴァンからガイに向けられた。

クロウは先ほどより眉間に皺を寄せ、普段の倍以上にガイのところを睨んだ。しかし、ガイにとってはそれが楽しいのか、面白いのかまったく同様を見せない。それどころか少し笑っている。

「そう睨むなよ、事実なんだしな。お前じゃ絶対にヴァン謡將を超えるほどの信頼を得られない」

「絶対ほど愚かな言葉は無いと思うのだがなガイ・セシル」

「お前とヴァンじゃ時間も違いすぎる、何より……お前にとってルークが絶対のように、ルークにとってはヴァン謡將が絶対なんだよ」

そんなこと、ガイに言われなくてもクロウは充分わかっていた。その証拠が、今日の前にあるのだからこれだけ皮肉なものはないだろうとガイは思った。

だからこそ、この場でクロウに言ったのだ。お前では絶対にヴァ

ンには勝てないと。そして言い訳できないクロウを見てガイは密かに楽しんでいた。

「それは……」

クロウは口をぱくぱくさせながら何かを言おうとしていた、けれど上手い言い訳が思いつかないのか、とうとう黙ってしまった。

それがあまりにも滑稽で、ガイはさらに意地の悪い笑みを浮かべた。それが気に入らないのかクロウは視線をヴァンとルークに戻した。

「ふん……」

ガイも気がすんだのか、ヴァンとルークに視線を戻した。その時丁度ルークが、地面に叩きつけられ腕にかすり傷を負ったところだった。

「っ……！」

ルークは痛みに関わらず顔に歪めしたが、すぐに体制を立て直した。普段ならばこのまま稽古続行、となるはずだったのだが。

「大丈夫ですか！ ルーク様」

クロウはその傷にいち早く反応し、すぐにルークに駆け寄ると腕を少々強引に掴んだ。そして、腕から微かに流れる血を見てすぐに譜術をかけようとした。

「何すんだよ、別にいいのー！」

「いえ、微かとはいえずぐに譜術をー！」

しかし、クロウが譜術をかける前にルークは強引にクロウの手を振り解いた。クロウは何故という目をしたがルークはとて不機嫌そうだった。

そしてクロウを睨みあつちいけと手をふった。

「この程度で治療って馬鹿じゃねーの？　こんなもんいちいち治療してたら日が暮れるってーの」

「しかし……」

「早く戻れよ、稽古の邪魔すんな！」

ルークはそう言うтусぐにヴァンと向き合つて剣を向けた、このまま此処に居ては迷惑だと思つたクロウは再び自分の居たところへと戻った。

クロウの情けない顔をガイは気分よく見ていた、しかし今度はクロウが反応しない。どうやらまだルークのことが心配なのか、じつとルークのところを見ていた。

それが面白くないのか、ガイは視線を空へと向けた。

「なんだかな……」

正直、ガイはクロウのことを気に入っていなかった。

最初はまあルークの近衛騎士ならば苦労するだろうなと少々同情のような気持ちがあつた、けれどクロウがルークのことを叩いたと知つた時、ガイの心の中に微かな敵意が芽生えたのだ。

ルークは今までヴァン意外に怒られることがなく育つたお坊ちゃ

まだった。そこには記憶喪失を哀れむものもあつたが、一番は公爵子息ということだろう。

だから誰も怒られない、何より叩くなどもつての他だ。そう、だからガイは独占的な復讐心を抱えていたのだ。

「（ルークに痛みを与えるのは、俺が一番先だ）」

他のものに復讐などさせてたまるか、ルークを殺しファブレ公爵に復讐するのはこの自分、ガイ・セシル——否、ガイラルディア・ガラン・ガルディオスただ一人なのだと。

けれど、復讐の機会を得る前にクロウはルークの頬を叩き痛みを与えた。それが激しく気に食わない、何より悔しかった。

ルークに痛みを与えるのは、ルークを殺すのは、自分ただ一人のはずだった。それなのに、クロウが先にルークに痛みを与えた。それが許せない。

だから、クロウとはまた違う嫉妬をガイは抱いていた。

「（俺が、絶対に……絶対にルークを殺す！）」

ガイの決心は誰の耳に届くこともなく、その心の中に強く燃え上がっていた。

第8話「勝負」

ルークの稽古が終わったのは、すでに日が傾いた時間帯だった。初めてから3時間は経っただろうか、それほど長い時間やっているのにルークは一度も休憩を取っていない。さらには普段はよく言う弱音やめんどくさいという言葉も一切言わない。

それでも師匠の前だからだろうか、それとも純粹に剣術が好きなのだろうか。どちらもあるだろうが、きっと前者に違いない。

「はあ……はあ……つかれたー！」

ルークは息を荒くさせなが大きく背伸びをした、既に手足にはかすり傷どころか痣まで目立つようになってきてしまった。それが不安なのかクロウはそわそわしている。

「今日は頑張ったなルーク、以前よりも上達しているぞ」

「本当ですか！ やったあ！」

「しかし、やはりまだ防御が出来ていない。今後はもっと精進なさい」

「うへー」

ルークは腑抜けた声を出しながらも嫌そうな顔をしない、むしろこうやって剣術のいいところ悪いところを指摘されて喜んでいるかのようだった。

これが他の使用人だったらルークは話を聞かず、めんどくさいだのウゼーだの文句を垂れているところだろう。

「ルーク様！ お願いですからさすがに治療させてくださいー！」

いい加減耐えることが出来なくなっただのか、クロウはものすごい形相でルークに近付いた。その恐怖すら感じる顔にルークは一瞬驚いたがすぐに面倒という言葉が顔に出た。

すると、ヴァンはルークの肩を叩き笑いながら口を開いた。

「いいではないか、このままでは風呂に入るとき染みるぞ？」

「ちえ、わーったよ。ヴァン師匠がそう言うなら……」

ルークの許可が下りた僅か0.001秒後にクロウの手からは光があふれ出していた。ルークはその速さに驚いたが、それほどまで心配している理由が分からなかった。

そういえば、稽古を始めたばかりの頃の母上もこんな感じだったことを思い出す。正直、なぜそこまでやるのかルークには不思議でならないのだが。

そう考えているうちに、既にルークの腕からは傷跡が綺麗さっぱりと消えていた。こういったことは自分には出来ないので、少しばかりクロウをすごいと思ってしまるのが悔しい。

「それにしても、稽古とは言え基本的なことしかしていないと思っていました……ルーク様は剣の腕が立つんですね。同じ剣を使うものとして驚いてしまいました」

「ん、なあ……っ！ あ、あたりめーだろ！ なんせ、ヴァン師匠に習ってんだからな！」

不意打ち同然に褒められたルークは顔を赤らめた、そしてすぐに師匠であるヴァンのこと立てた。

もちろん、お世辞などではなくルークの本心なのだが。

「それだけではないぞ、剣術とは基本は誰でも出来るがそれ以上は才能だ。ここまで出来るのはルーク、お前の才能のおかげだ。自身

を持って」

「えへへへ、本当ですかヴァン師匠！」

ルークは今にも喜びでどうにかなってしまいそうだった、それほどヴァンに褒められるということはルークにとっては誇り高いことなのだろう。

「ヴァン殿はとても良い師匠であらせられますね」

「そーだろ！　なんとってヴァン師匠なんだからな！　強さだったらクロウだって絶対に敵わねえよ」

その、ルークにとってはなんでもない言葉がクロウの顔を曇らせた。その変わりようにルークは一瞬驚いた。

「たしかに……ヴァン殿は強いですが。私が絶対に負けるなどと言うことはありえませんか」

クロウはルークの前だからだろうか、笑いながら言うが声が全然笑っていない。それはこの場に居る誰もが感じ取れるほどはつきりとしたものだった。

たしかにヴァンは強いだろう、しかし己の主の口から『自分の騎士より強い』と言われればさすがに騎士としての立場がない。

そもそも、自分の強さはそれほど信用ならないものか、それに変わりヴァン師匠は絶対に強いなど。正直、気に入らない。いくらルークに悪気がないとは言えこれだけは納得出来なかった。

「何言っただよ、ヴァン師匠よりお前が強いわけねーだろ！」

「絶対とは言いませんけよ」

「んだと?!」

このままでは悪化すると思ったガイは手を数回たたき二人の視線を集めた。

「だったら、実際に戦ってみたらどうだ？ ヴァンはルークの稽古で疲れているからハンデとしては充分なんじゃないのか？」

「ハンデ……だと？」

「ああ、普通に戦ってもお前が勝てるわけないだろうからな」

たしかに、先ほどの稽古を見ていてもヴァンは強かった。しかしクロウも自分の強さには自信がある。

それはレイウォルト家のプライドだのではない、ただ純粹にルークの騎士をまかされているのに弱いと言われるのが気に食わないだけだ。

ルークの騎士であるのに弱いといわれるのは、まるでルークを侮辱されているような気分になる。

「それに、ハンデがどうこう言ったりするのはヴァンに勝ってから言ってくれ」

「……っ！ 分かった」

「てわけなんだけど、いいですよ？ ヴァン 謡将殿」

仕方なく納得したクロウの返事を聞いてガイは楽しそうにヴァンに戦闘は可能かと聞いた。すると、ヴァンは普段の笑顔で返事を返す。

「ああ、そうだな。ルークの近衛騎士がどの程度のものなのか私も知りたいのだな」

「剣はどうしますか？ 真剣でよろしいのですか？」

「ふむ、そうだな。貴殿も剣を生業に使う騎士、真剣でなければ失礼だろう」

すると、クロウは肩に掲げた大剣を取り出す。その剣は怖いほど夕焼けに輝き、まるで血が滴っているようにすら見えた。

クロウは自分の身長ほどはあろう大剣を軽々と持ち上げる、その姿は顔に幼い面影を残すクロウがファブレ公爵に雇われた近衛騎士だということを思い出させる。

「立会人はセシル、よろしいですか？」

「ああ、俺は別に構わないぜ」

ガイがそう言うと、ヴァンも自らの大剣を取り出す。大きさはクロウのものより若干大きめで、構える姿はクロウより様になっている。

己の師の姿がカッコイイのか、ルークは目を輝かせヴァンの見ていた。たしかに、剣士としては理想の姿なのかもしれない。正直、クロウも戦う相手でなければカッコイイと思ってしまいかもしれない。

ヴァンとクロウは互いに対になるように立つと、相手に敬意を示す為例をした。これは剣士が手合わせする上でする礼儀のようなものだった。

「ヴァン師匠！ 頑張ってくださいーい！」

ルークの言葉にヴァンは笑って答えた、それが気に食わないのはクロウはガイに早く始めるように急かした。

「それじゃあ、初め！」

ガイの言葉とほぼ同時に飛び足したのはクロウだった、その速さは大剣を使う者にしては早い方だろう。クロウはすぐに大剣を振り

上げヴァンの大剣に振り下ろした。

鋼と鋼が触れ合う音、それはルークの訓練の時には聞こえない凄まじい音だ。それは互いが互いを叩きのめす時に聞こえる音なのだろう。

「……っ！」

しかし、クロウの一撃はヴァンにとってたいしたことがないのか、まるで相手が赤ん坊であるかのように安易にその剣をはらってしまった。

クロウの剣はたしかに重い、大剣とは一撃必殺の武器だ。けれど、その一撃の攻撃をあんなにも簡単に止めてしまうのはクロウの未熟さ故だろうか。それとも、それほどまでにヴァンが強いからだろうか。

反動で吹き飛ばされたクロウだったが、すぐに体制を立て直すと再びヴァンに向かって行った。何度向かっても先ほどと同じ結果になってしまふ、だが今回は違った。

「紅蓮剣！」

クロウの声と共に振り下ろした剣の先から音素が放たれ、それは形となって現れた。

第五音素は大剣を包み一つの武器となってヴァンの大剣と互いにぶつかる、いくらクロウがヴァンより威力が弱いとは言え音素を使われてしまえば耐え切れない。

「くっ！」

今度の攻撃は弾き返せずヴァンの態勢が崩れた、その隙を狙ってクロウはさらに攻撃を続けた。

しかし、この程度で主席総長が務まるわけがない。

「遅いな」

クロウの攻撃はまたもや簡単に防がれてしまった、クロウの攻撃は戦術としてはよかっただろう、けれど相手が悪かった。そうしか言えない。

ヴァンはそのままクロウを弾き返すと、次は攻撃に転じた。あまりにもすばやい動きにクロウは防御にうつる時間が無く、たとえうつれていたとしても防ぎきれなかっただろう。

無理矢理よけたせいか、クロウの服と肌に剣が触れ血が流れているのが分かった。クロウは微かに顔を歪めたがそれも一瞬のこと、次の瞬間にはすでに攻撃に入っていた。

しかし、腕や剣の差でクロウの位置からヴァンを攻撃するにはリーチが足りない。

「はああああ！」

一瞬、ヴァンは防ぐ必要が無いと感じてしまった。何故ならばクロウの剣が自分に届くはずが無い、そう感じてしまうほどクロウの位置は遠い。

しかし、その考えは頬の痛みと共に消え去ってしまった。

「っ……これは！」

クロウの位置はたしかに遠かった、クロウの手も長いとは言えない、けれどたしかにクロウの剣はヴァンの頬を掠った。

そのことにヴァンは驚きの声を上げた、何故ならばクロウの大剣は先ほどの倍以上の大きさをしていたのだから。剣自体の大きさは変わっていない、しかしその回りには朱色の音素が纏われ剣の刃と

なっていた。

結果、それは一つの大きな剣となりあれほどまで遠かったヴァンの頬を掠るほどまでの大きさへと成長していた。

「なるほど、その装飾品は音素の集合体か……っ！」

ヴァンはクロウの剣についている宝石を見てそう言った、それは一見ただの装飾品にしか見えない。けれど、それはたしかに光を放ちその存在を主張していた。

「レイウォルト家、聞いてはいたが」

「我が家のことを知っておられて光栄でございます、ヴァン・グラント殿」

光り輝く大剣を見ながらヴァンは以前聞いた話を思い出していた。レイウォルト家というのは騎士の名門、高い確率でファブレ公爵の白光騎士団に入っている。そして何より有名なのは、主に誓う絶対的な忠誠、そして光り輝く大剣。

それは代々受け継がれるとある宝剣のおかげだと言われていた、それが今クロウの持っている大剣のことなのだろう。

「音素を刃として持続させるとは、さすが……」

音素とは本来エネルギーでありそれを形にさせるのは至難の業、だからこそクロウも最初からでは無く今使ったのだろう。何より、これは相手の意表をつくのには最適だ。

もちろん、それだけではなく音素をまとっているお陰でダメージも大きい。ひとたび切り付けられれば刃の傷みだけでは済まないだろう。

「これで、最後だ……っ！」

その声と共にクロウは大剣を高く振り上げヴァンに向かって切りつけた、ヴァンもすぐさま攻撃の態勢に変わりその剣を受け止めようとした。

これで全てが決まる、両者は互いに相手のところへ飛び込むように切り付ける。そして互いに刃を合わせる音は聞こえなかった、どちらかが相手を仕留めたのだろう。

そして、クロウは口元を吊り上げ笑みを浮かべ口を開いた。

「勝ち、のようだな……」

クロウはそう呟いた、何故ならばヴァンの袖は切れていたからだ。もちろん裾しか切れていないが、わざと腕を切り取らなかったのが分かる。

その手はヴァンの利き腕、ならばクロウが本気でヴァンを倒そうとしていたならば、ヴァンの腕は既に地面に落ちていただろう。だから、これはクロウの勝利だった。

その結果にルークは驚いていた、しかし隣りに居たガイは笑っていた、そしてそれはヴァンも同じだった。

「そうだな、どうやら私の勝ちのようだ」

ヴァンがそう言った瞬間、クロウの首からは血が流れ出た。

「……っ！」

とは言っても皮膚を切られたただけだろう、流れたのは血だけでクロウの首は飛ぶことは無かった。

しかし、それもわざと皮膚しか切らなかつたということは誰にで

もわかった。きっとこれが本当の試合だったならばクロウの首は地面に落ちていたに違いない。

そもそも、あの状態で首に刃がいくことを許した自分が情けない、本来ならばそんな愚行はしない。けれど、この結果はクロウの防御が不完全だったからではない。

「何故」

クロウとしてはなにもかもが完璧だった、隙を許したつもりなど無かった、けれどヴァンはクロウをたしかに仕留めた。

まるでクロウの努力など知らぬかのように、ヴァンは平然とそれをやったのけた。

だから、もしかしたらこれは戦う前から決まっていたのかもしれない。まるでこの星を支配している予言のように。

「すげー！ ヴァン師匠ってマジですげーよ！」

ルークが興奮してつい叫んでしまった、しかしクロウはルークがヴァンを褒めることをいやな目で見ない。それよりも、ヴァンに負けたことが不服だったのか、それとも圧倒的な力の差に絶望したのか。

いや、これはきつと絶望するのもおぞましいほど絶対的な差。剣士として、クロウはただヴァンの強さを認めるしか出来なかった。

「参りました……っ」

クロウがそう言った瞬間、ガイの試合の終了を告げる声が中庭に響いた。

第9話「尊敬のあり方」

試合終了と共に、ルークは勝利を収めた師匠であるヴァンのところに走った。

「やっぱヴァン師匠ってマジでつえー！ あんなにも早く決着つけちまうんだもん！」

髪の毛を揺らしながら本人以上に喜んでいるルークを見ながら、クロウは自分の首に手を当てた。

感じるのは傷口から流れる自分の血、それが未だに信じられないかのように何度も摩り、血で染まった手を握り締める。

そして、クロウはヴァンに近付くと先ほどの身の程を知らぬ行為を詫びるかのように頭を下げた。

「先ほどは失礼いたしました、ヴァン殿がこれほどの実力の持ち主とは」

「いや、自分より強い相手と戦うことも経験のひとつだ。それに……」

「どーだ！ やっぱりお前よりヴァン師匠の方が強かっただろ！」

ヴァンの言葉を遮りルークはまるで自分のことかのように自信ありげに言った、その表情はなんとも子供らしい愛らしいものだった。

「はい、さすがルーク様の師匠。むしろ私をご指導願いたいほどです」

「へっ！ ヴァン師匠に剣を習うのは俺だけなんだからな！ ぜってーお前になんて譲らねえよ！」

ルークは腰に手を当てながらまるで自慢するかのように言った、それほどまでにヴァンを独り占めしたいのか、それともヴァンの弟子であることが誇らしいのか。

たぶん両者だろうが、それにしたって少々強すぎる気もする。だが、これがヴァンとルークの関係のあり方なのだろう。

ヴァンという存在はルークにとって誇らしい師匠であり、だれよりも信頼できる大人であり、そして自分を必ず正しい方向に導いてくれる光。

だから、ルークにとってはこの独占欲も普通なのだろう。なにやり図体はデカイが中身はまだ5歳児、幼い故の独占欲もあるのかもしない。

「そうだ……あの、ヴァン師匠」

ルークが突然口調を変え話しかけてきた、その態度は先ほどの強気なものとは打って変わってずいぶん幼い印象を持たせる。

「なんだ？ 突然よそよそしくなりおって」

「あ、あの……明日まで居てくれるんですか？」

「ああ、済まない。今日は帰ってしまう。だが……」

すると、ヴァンは木刀を取り出した。それは真新しい新品で、光沢感がある。ヴァンはそれをルークに差し出し大きな掌でルークの頭を撫でた。

「正確には明日だが、15歳の誕生日おめでとう。師として心から祝おう」

「ヴァン師匠……っ！」

誕生日を覚えていてくれたことより、木刀をプレゼントとしてく

れたこより、何より自分の弟子の誕生日を祝ってくれたその心が嬉しい。

ルークは蔓延の笑みを浮かべて、ヴァンに抱きついた。15歳という外見にしてはとても幼く見えるのは実年齢か、それともその表情故なのか。

「ヴァン師匠！マジでありますっ！俺、この木刀は一生大切にしますから！」

ヴァンから貰った木刀をルークは大切そうに抱え、嬉しそうに眺めた。

どうやらこれは本格的なものらしく、今までの木刀とは違いリーチも長く中に鉄が入っているのか真剣と同じくらい重い。

この木刀を選んだということはヴァンもルークが強くなっており、このような本格的なものを使ってもいいと考えての行為なのだろう。それもヴァンに強さを認められたかのように、とても嬉しい。

「よかったなルーク、けっこう立派なものじゃないか」

「へへ、いだろー！」

ルークは今にでもこの木刀で稽古をしたいのかうずうずしている、しかし空で輝く太陽はそれが不可能だと告げていた。

すでに夕暮れを迎えた空は、あと数時間で夜が来るといふ事実をこの場に居る全員に教えた。すると、ヴァンはルークの肩に手を置いた。

「夕食までならば付き合えるぞ、早く風呂に入って体を洗い流しておきなさい。このままでいれば風邪を引く」

「はい、わかりました師匠！ガイ、早く風呂に入ろうぜ！早くしねーとヴァン師匠が帰っちゃうんだからな」

「はいはい、わかりましたよルーク坊ちゃん」

「その名前で呼ぶなってーの！」

ガイと笑いあいながらルークは風呂への道を歩いた、クロウもすぐその後に続くとうとしたが、それは何者かがクロウの肩を掴んだことによって拒まれた。

「少し、話をしてもいいか？」

顔を見ていないせいだろうか、その言葉が何故か怪しく聞こえたのは。

おもわずクロウが振り返ったその視線の先にあったのは、先ほどルークに見えた笑顔とまったく変わらないヴァンの表情だった。

「ルークの予言の話だ」

「……………っ！ 何故、貴方が」

ヴァンの言葉があまりにも予想外だったのか、クロウの目は見開き動揺していることが伺えた。騎士たるものの動揺を敵に悟られるのはあってはならないが、ヴァン相手では仕方がなかったのかもしれない。

何せ、ヴァンは信託の盾騎士団の主席総長たる人間だ。つまりは予言を厳守する立場に居る人間に、予言を壊すためにルークに使えさせられたクロウは消さなければならない人間。

だがそんな人間を前にして、クロウは己の武器である大剣を抜くことは出来なかった。今この場で戦っても勝ち目など無い、そうさきほど実証されてしまったのだから。

「私を消しますか？」

「消す？ 何故、私が」

「貴方がた信託の盾にとって予言とは厳守されるもの、それを乱す存在は消す……そうではないのですか？」

クロウの隠せぬ敵意に、ヴァンは一瞬驚いたような顔をし……そして笑った。

「どうやらクロウ、キミは勘違いをなされているようだ」

「勘違いだと？」

「私はルークを予言から開放し助けたいと願っている」

それは、あまりにも意外でとても信じられるような言葉ではなかった。

ローレライ教団の詠師であり、信託の盾騎士団の主席総長たる人間が、いくらファブレ公爵の子息であるルークとはいえ守る理由はいつたいなんだと言うのだろうか。

それが王宮に張り巡らされている蹴落としあいから守るというならばまだいい、しかし今日の前に居る男は予言というローレライ教団では絶対に守られるものを壊そうとしているのだ。

信じられない、そう徹底的にヴァンを否定しようと口をあけた。けれど、先にヴァンがその言葉を遮った。

「そう、君と同じように」

その言葉を言われた瞬間、クロウは全身が凍りつくような錯覚を覚えた。

「なんで……」

「私は知っている、どうしてもお前がルークの騎士に選ばれたのか、その背中に背負っている責任も。だから同じ志の人間を私は求めていた」

この男は知っている、自分がルークの騎士になった理由と意味を、そしてさらには同じ志とすら言ってきた。

「待て……っ！ 貴方はローレライ教団の人間、どうしてそんな人間が！」

「予言を覆すようなことをするのか？ やはりクロウ、君は勘違いをしている。現在ローレライ教団は二つの派閥に分かれつつある。導師イオンを中心とする改革派、大詠師モースを中心とする保守派。私は導師イオンと共に予言は運命ではなく選択肢であると考えている」

「選択肢……」

「予言が絶対である必要などない、私は予言を潰すために信託の盾に入った」

すると、ヴァンは先ほどの優しいまなざしとは違う。真剣な、主席総長としての威厳を持つ表情になった。

「私とお前は同じ願いを持つ同士だ、ルークを助けたい。そして予言を覆したい」

だから、何故かヴァンの言葉が信用できてしまった。

そのヴァンの瞳から本当にルークを助けたいという願いが伝わってくるかのように、クロウに何かを確信させた。

だって、本当にルークを助けたいと願わぬ人間がこんな瞳を見せることが出来るだろうか。正直、クロウはそうは思わなかった。

「だから、協力してほしい。ルークを助ける為に、私も予言によって愛しい弟子を失いたくない……」

ヴァンは何かをクロウに伝えるかのように、クロウの肩を強く握り締めた。

「私には、お前が必要だ」

そのヴァンはとても必死に見えた、普段の主席総長としての風格や威厳を持ち合わせていながら微かに伝わってくる必死さ。

強く痛いほどに握られた肩はまるでヴァンの想いが込められているかのように熱く、そして何かを感じ取ることが出来る。

だからだろうか、ルークの為に回りの全ての人間を疑わなくてはならない立場のクロウが一瞬だけとはいえ、この男を信用してもいいと感じたのは。

「私が……必要？」

今まで、この男にはあまりいい印象を抱いてはいなかった。けれど今は違う、信頼できる。

「私はまだ、正式なルーク様の騎士ではありません。けれど……」

クロウは己の剣を出し、そして目の前に掲げる。それは剣士ならば誰でも知っている、そう剣士同士の誓いを意味する行為だった。

「貴方が本当にルーク様を守りたいと想うのであれば、誓ってください」

「なるほど、レイウォルト家は誓いを重んじる。噂に聞いたとおりだ」

すると、ヴァンはクロウの誓いを肯定するかのように己の剣を引き抜いた。

両者の剣は、先ほどまで相手を打ちのめすための道具であり武器として存在していた。けれど、今この場で両者の剣は戦う為ではなく、誓うためだけに存在する。

剣は交わり、鋼がこすれる音が響いた。そしてヴァンとクロウは同時に口を開き剣士の家系に伝わる歌のような言葉をその口からつむぎ出した。

我が剣は同じ志の為に

我が心は同じ主の為に

この命が、尽き果てるまで

剣を共にすると此処に誓う

これこそ、剣士の誓いなり

その歌のような誓いが終わると、二人は互いに剣を柄に納めた。

「私は常にこの屋敷に居られるわけではない、だから普段ルークを守るのはお前に任せる」

「分かりました、必ずや私がルーク様をお守りいたしましょう」

クロウがそういうと、ヴァンはとても優しい笑みをした。その笑みにつられてか、ルーク意外に始めてクロウは笑った。それは年齢

に相応しい幼いものだった。

「そういえば、お前はどうかやら嫉妬しやすい性格らしいな」

「え？」

「いや、先ほどルークが私にすがり付いてきた時にとても悔しそうな表情をしていたのでな」

ヴァンの言っていることはたしかに真実だった、どうも自分以外の人間にルークが懐いているのが気に食わないというか、納得いかないと言うか。

たしかにヴァンもガイもルークと接している時間が長いから仕方ないとはわかってはいるのだが、それでもやはりルークの信頼をいち早く得たかった。

だが、こうやってヴァンに改めて嫉妬していると言われるとなんだかとても恥ずかしい気がしてしまう。

「そ、それは」

だからこうして言われてしまうと、どうしても頬を赤く染めてしまう。

「なに、悪いことではあるまい。それほどまでルークのことを想っている騎士と廻り合えて、むしろ嬉しいくらいだ」

「あ、ありがとうございます」

「それに、そのことについてあまり悩む必要は無い」

「ですが、私は少しでもルーク様との信頼を深めなければ。だから私はヴァン殿のように、ルーク様に…」

クロウがあまりにも弱気な発言をしたせいだろうか、ヴァンはあまりに可笑しいとも言いたそうに笑った。

「信頼の得方とは様々だ、そしてその形も。私はルークの師としての信頼を、お前は騎士としての信頼を得ればいい。私と同じものを求める必要はない」

たしかに、ヴァンの言うとおりなのかもしれない。

信頼の形とはそれぞれ、中にはヴァンのように尊敬を含む信頼やガイのように友情を含む信頼というものもあるのだろう。

「それに、お前は充分信頼されている。今までルークがお前のこと猛烈に拒絶しないところを見て、これは確かだと言っていいたいだろう」「本当ですか?!」

「ああ、今までルークを見てきたものとして保障しよう」

ヴァンのその言葉を聞くとクロウは蔓延の笑みを浮かべた、それは普段のクロウからは想像し難いものだったが、嬉しいという感情が溢れていた。

「ルークのわがままで師匠にはなれぬが、相談相手ぐらいは出来るだろう」

「ヴァン殿…… 本当に、ありがとうございます!」

「そろそろルークのところに行ってやった方がいいだろう、きっと待っているぞ」

「はい、それでは失礼いたします」

柔らかい笑みを浮かべながらクロウはルークの後を追った、その時微かに視界に映ったヴァンの顔はとても優しいものだった。

若い男だと思っていたが、威厳はたしかかなもので人を安心させることが出来る。これならルークがヴァンのことを信頼しており、師と仰ぐ気持ちがよくわかった。

「ありがとうございます、ヴァン殿」

クロウにしては珍しい、お礼の言葉を言いながらルークが居るだろ
うお風呂場へとクロウはかけていった。

その顔には笑みを浮かべながら、そしてその心にはヴァンへの信
頼と誓いを抱きながら。そのクロウの顔はとても幸せそうなもので
ルーク以外には見せない特別なものだ。

作り笑いをしながらヴァンはクロウを見送った、そして完全にク
ロウが見えなくなってからヴァンはその笑みを嘲笑へと変えた。

「子供など、容易いものだな」

それは、この先に訪れる未来への嘲笑でもあったのだろうか。
けれど、その結末を知る者は、この場にはヴァンを抜かして誰も
居なかった。

第10話「子供」

澄み渡る空、清々しい空気、優しい小鳥たちの歌声、そんな素晴らしい舞台に似合わない表情をした少年が一人居た。

腰まである赤い髪はきつちりと結ばれており、その服は普段の公爵子息らしからぬものとは一変して、改めてルークは王族なのだと実感させる高貴なものに変わっていた。

これで、そのエメラルドグリーンの瞳はぱっちりと開き、口元には笑みが浮かべられていればこれほど愛らしい少年は居ないだろうに。

「うぜー！ 早く脱ぎてー！」

堅苦しく非常に実用性よりも見た目を重視されている服を脱ぎたそうにルークはベッドに倒れこんだ。

「ルーク様、髪が崩れてしまいますよ」

「いいんだよ、こんぐらい。それに俺は女じゃねーから髪を小奇麗にする必要なんぞねえってーの！」

頑張つて綺麗にしてくれたメイドたちの努力もルークにとっては面倒でしかない。

まあ、多少人形のようにいろんな意味で可愛がられていたルークに同情するべき点も少なからずあるのだが。

「これだから誕生日は嫌いだ」

何故、ルークがこんな格好をするのか。それは全て今日がルークの誕生日という記念すべき日だから。

普通ならば誕生日は待ちに待った日であり、友人や家族と一緒に誕生日会をして楽しいひと時を過ごす日だ。

けれどルークは15年間、正しくは5年間の間で誕生日を楽しんでいると思っただけは一度もなかった。

息苦しい服を着て、客人には礼儀正しく愛想をまけと言われ、面倒な儀式だの挨拶だの、非常に窮屈な日を送ることになる。

だから、ルークにとって誕生日とは楽しくない非常につまらないものだという印象しか無い。

「しばらくの辛抱ですよ、ルーク様」

「そのしばらくが我慢できねえ〜！」

ベッドの上でバタバタと手足を動かすルークしたルークはふいにクロウの顔を見上げた。

「なあ、クロウってどんな誕生日だった？」

「え？　わ、私のですか……？」

突然言われた質問にクロウはしばらく戸惑った、そして過去の記憶を必死に探り出したのか悩んだ末話し始めた。

「そうですね、家族と一緒に祝っています。母上の作ってくださいましたケーキがとても美味しかったと記憶しております」

「プレゼントとか貰ったりするの？」

「ええ、前々から欲しがっていた本など」

クロウの少々客観的な言葉にルークは興味津々に頷いた。

普通に家族と祝う誕生日が羨ましいのか、それとも見たことのない世界のことを聞いてみたいのか。きっと前者だろう。

ルークにとって、普通に家族全員で祝い欲しかったプレゼントを

貰うことは未知の世界であり、体験したことないことなのだろう。

「やっぱり、誕生日って楽しいものなのか？」

「そうですね、私はとても楽しかったですよ」

そのクロウの言葉に、ルークは再びベッドに倒れこんだ。

「楽しいのか……初めて知った」

その言葉はクロウにとって以外なものだった、てつきりガイやヴァンから聞いていたと思っていたからだ。

ルークの性格ならば仲のいいガイにでも聞いていそうだと。

「セシルには聞いていないのですか？」

「なんかしんねーけど、ガイに誕生日のこと聞いても話してくんねーんだよ」

「そうなのですか？　以外ですね、ガイは市民出身ではないのですか？」

「さあな、そついやガイが何処出身かなんて聞いたことねえ……」

そこまで聞いて、クロウは一瞬もしやと思った。ガイがマルクトの人間で、復讐の為にこの屋敷にやってきたのではと。

すると、ルークはクロウの顔が急に暗くなつたことに気付き力強く言った。

「お前、まさかガイを疑ってんじゃ……」

「え、いや……そのようなことは」

「いいか！　これ以上ガイを疑ったりしたら今日の騎士の誓いほっぽりだして逃げてやるからな！　つーか、むしろ命令だ！」

ルークの怒りの籠った言葉に、クロウはしまったと思った。あの日、あれほどルークの心を傷付けるようなことはしないと誓ったはずなのにこのザマだ。

これでは近衛騎士として失格だと思い、クロウは素直に頭を下げた。

「わかりました、ルーク様の命令でしたら」

「ふん！」

最初から機嫌が悪かったルークがさらに機嫌を悪くしてしまいクロウは戸惑った、とにかくなんとかして機嫌を直してもらおうと考える。

「もうしわけありません……」

しかし、クロウが誤った程度でルークの機嫌が直るわけない。ベッドで枕に抱きつくすねた子供の機嫌を取り直すには相当苦勞しそうだ。

これはしばらくルークのもとを離れたほうがいいと考えたクロウは、ドアを開けた。

「それではルーク様、しばらく失礼いたします」

「うー」

「では、ガイを呼んできましようか？ その髪型では、奥様に叱られてしまいますよ」

クロウに言われルークは初めて自分の髪型の酷さを知った、鏡に映っているのは先ほどの綺麗に結ばれた髪ではなく、まるで鳥の巣のように見えるに耐えない姿になっていた。

「早く呼んでこい」

ベッドに顔を埋めている主を見ながら、クロウは外に出た。

その時、中庭に居た数人の白光騎士団の騎士がこちらを睨むように見た。その視線はとても黒い感情が込められたもので、主の前では決して見せないようなものだろう。

「何か、用ですか？」

クロウの普段よりも一段と低い声に、騎士は笑顔で……と言つてもまったく笑っていない声で答えた。

「いえいえ、なんでもありませんよ『騎士見習い』様」

「それよりルーク様とはどうですか？ まさか、信用ならない関係だなんてことはありえませんかよね」

はつきりと込められた悪意に、クロウは一瞬反応しなくなった。

けれど、此処で反応すれば負けだ、そう自分に言い聞かせる。

別に貶されているのは自分だけだ、ルークが貶されているわけでもない。ならば、この程度反応するにも足らない。

「そうですね、ルーク様とはとても深い関係を築けております」

「深い関係？ 不快な関係ではなくて？」

「……っ！ まさか、そのようなことはありませんよ？」

そうだと、このような安易な嫌味に乗ってはいけない。たとえルークとの自分の信頼を貶されようと、事実的に貶されているのは自分なのだから。

それに、実際あまり良い信頼関係とはいえない。だからこれは自分への戒めだと思えばすむことだった。

「それでは失礼いたします、ルーク様から命令を受けておりますので」

クロウは何事もなかったかのように歩き始めた、それが気に入らないのか騎士たちは舌打ちをした。

どうせ、あのような嫌味を言う理由などたかが知れている。自分のように若く入ってきたばかりの人間がルークの近衛騎士になることが気に入らないのだ。

誇り高いことは素晴らしい、けれどそれが嫉妬へと変わりゆくのは見ていてなんと見苦しいものか。そんな騎士を哀れに思いながらクロウは歩き出した。

けれど、その時だった。騎士の一言がクロウの行動を変えることになった。

「餓鬼が……騎士ごっこはよそでやれってんだ」

騎士が言い終わった途端、素早い風が吹いた。そして、その場に居た騎士全員が見たのは無愛想なクロウでは絶対に見せないだろう怒りの表情。

そして、その風は先ほどクロウのしていることを『騎士ごっこ』と貶した騎士に向かった。

「……っ！」

あまりにも素早い動きに誰も反応出来ない、そしてクロウの左手は握られ、その拳はたしかに騎士目掛けて飛んでいく。

誰もが殴られる、そう確信したときだった。

「止めなさい」

怒りに導かれたクロウの左腕を掴むものがいた。

「隊長……っ！」

一人の騎士がそう呟くのが聞こえクロウは振り返る、そこにはたくましい肉体を持った40代ほどの男が威風堂々と立っていた。

それはこの屋敷では誰もが知る白光騎士団の隊長、グレン・ラスカーだった。

「お前等！ 持ち場を離れて何をやっている！」

「す、すみません隊長……！」

「つまらぬ話をせず、早く持ち場へ戻れ！」

その一言により、先ほどまで集まりクロウを貶していた騎士たちは雨にうたれた蟻のごとくちりじりになっていった。

騎士たちがたしかに持ち場に戻ったことを確認し、グレンはクロウの手を話した。

「大丈夫か？」

「はい……ありがとうございます」

「氣にするな、誇りを嫉妬に変えた騎士程度に腹を立てる必要はない。そのせいで公爵様から叱られてしまえばあいつ等の思うとおりだ」

グレンは情けないといったため息をついた、騎士の責任は隊長であるグレンの責任でもあるからだろう。

「私の教育がなくなって迷惑をかけた、すまない」

「いえ、私は大丈夫です」

「……………」

クロウが頭を下げた時、グレンはなにか申し訳無さそうな、むしろクロウを哀れむような表情をした。

その視線が気になり、クロウは首を傾げた。

「あ、いや……君はまだ若いからな。何故、騎士をやっているのかと」

「騎士とは若さではなく実力によって選ばれると思います。年齢、地位、たしかに必要なものありますでしょうが重要なのは実力です」

自分の意見をはっきりと述べたクロウの瞳はとても輝いているように見えた、しかしグレンは何故か悲しそうな表情をした。

「君はたしか貴族出身と聞いた、ならばまだ働く必要は無いだろう」

「……私が、騎士に相応しくないとでも？」

「いや、そういうわけじゃない。ただ私にも君と同年代の子供が居てね、子供が戦うところを見るのは心が痛むんだよ」

なるほど、と思った。たしかにクロウの年で働いているものはたくさん居る、けれどそれはもう少し田舎の方や下級層でありクロウのような貴族はまだ働く必要がない。

むしろ、勉学を極め親の後を継ぐのが普通だ。だからいくらレイウォルト家が下級貴族とはいえ、その息子が働く必要はない。

「ですが、これは私が決めた道ですので」

クロウは頭を下げ、その場を歩き出した。あの場に居ることが酷く苦痛に感じたからだ。

あれではまるで、お前は子供だから大人しく家に帰れと言われているみたいだ。たしかにクロウは16歳と大人たちの間では子供に入るだろう。

けれど。

「年齢がなんだ……っ！」

強く握られた拳は、行き場を求め壁に打ち付けられた。それはたしかに音となりあたりに響き渡った。

けれど、音が消えたようにクロウの怒りが消えることはない。

「子供だからだと？　子供だから騎士としての覚悟が足りないとも言うのか？！」

騎士としての覚悟だったらある、主の為に、ルークのために命を散らす覚悟だってある。それなのに、なぜこつも罵倒されなければならない。

「私は父の後を継いで騎士になったわけじゃない！」

たしかに大人から見れば、クロウはコネか何かでルークの近衛騎士になった甘ちゃんだと思っだろう。

事実、クロウがルークの近衛騎士になったのはクロウに予言が無いからという理由で、決して実力を買われたわけではない。

だけど、クロウは決して遊びでやっているわけではない。決して『騎士ごっこ』をしているわけじゃない。

「この誓いだけは本物だ……ルーク様との誓いは本物だ、私だけのものだっ！」

決して、心に残る忌々しい人物のものなどではない。

第11話「復讐心」

部屋に訪れた時には、既にルークの髪の毛は想像どおり鳥の巣状態だった。

「お前、何したらこんな風になるんだ？」

「仕方ねーだろ、なっちまったんだからよ」

ガイは深いため息をつきながらルークをベッドに座らせ、酷く乱れたルークの髪を梳かし始めた。

日々、ガイが心を込めて手入れをしているせいかルークの髪の毛はすぐに元通りになっていく。

女性たちが努力を積み重ね手に入れている髪の手を持つているルークはメイドたちから見てもさぞ羨ましいだろう。これもガイの努力の結果だ。

「まったく、メイド達がガツカリするぞ」

「俺は人形じゃねーんだぞ」

「まあ、こんぐらい髪が長ければ人形にしたい気持ちも分かるけどな」

枝毛は無い、さわり心地はシルクのように、腰まである長さ、昔から人形をめかしつけることが好きな女性にとってルークは格好の獲物だろう。

その証拠に、ガイは時々ルークの髪を梳かす係りを変わってくれとお願いされるのだ。任せた時のルークの不憫さと、のちのち返ってくるだろう復讐が嫌で任せたことはなかったのだが。

「よし、完成だ！」

見事に結ばれた自分の髪に、ルークは驚くと同時に嬉しそうな表情を見せた。

「やっぱガイってスゲーな！」

「あたりまえだろ、何年お前の使用人やってると思ってるんだ？」
「そりゃそーだ」

ガイは生まれた時から居るようなもので、きっとガイならばルークのことで知らないことなど無いだろう。
時々そのせいでクロウの顔が阿修羅に変わるのだが。

「家庭教師が教えてないことは、ほとんど俺が教えたに近いからな」
「そうだったけ？」

「ああ、コンドームって何って聞かれた時はさすがに困ったけどなホント、お前何処で覚えてきたんだよ」

「なっ！　んなことまで覚えておくなよな！」

「いやー、お前に教えたことが旦那様にばれたら叱られちまうな」

そこまでいって、二人は笑った。ガイは育ての親であると同時に、ルークの一番の親友なのだから。

だから、そのガイを侮辱するクロウが許せない。仕事として仕方がないのかもしれないけれど、それでもやっぱルークは納得出来なかった。

そして、親友だと思っているのはガイも同じだ。そうルークは信じていた。

「そーいや、ガイって誕生日のことだけは教えてくれたことなかったよな」

しかし、ガイは違った。

「そ、そうだったか？」

ルークの言葉に、一瞬だけガイの笑顔が曇った。

「さっき、クロウが教えてくれたんだよ。普通の家じゃプレゼント貰ったり、祝ってもらったりして楽しいんだってな」

「まあ……な」

「スゲーよな、俺今まで誕生日なんてつまんねーもんだと思ってたんだけど」

「ああ」

「なあ！ ガイもやっぱり誕生日って楽しかったか？」

楽しいだろ？そんなこと、あるわけないだろう。

自分の誕生日のことをルークに語ってやりたい。いかに誕生日というものが自分にとって忌々しく、この復讐劇の幕開けとなったのか。

お前は笑えるだろう、この場で笑って嬉しさや喜びを感じられるだろう。なんの悲しみも憎しみも抱いていないのだから。

けれど自分は違う、殺された姉や両親は違う。嘆き、悲しみ、苦痛に耐え、憎み、恨み、そして復讐を誓った。

「そうだな、楽しかったよ」

今お前に見せている笑顔も、全てが仮面だと言ってしまいたい。あの日、自分の誕生日が惨劇を超して喜劇とすら思えたことを語りたい。

お前に抱いている感情は全て憎しみに溢れ返っている、あの日の悲しみが、憎しみが今の俺を構築している。

「すぐく、すぐく……」

ファブレ公爵に復讐を誓うほど、とても楽しく憎らしい誕生日。それは自分の心の中から永遠に消えない惨劇。

「へー、やっぱりそうなのか」

お前は知らないだろ、自分が今この場でお前の首を絞め死ぬ寸前のところで離して、そして髑殺したい衝動に駆られ、それを必死に我慢していること。

お前の腹を引き裂いて、内臓を全て抉り出して、けれどルークだということは分かるように顔だけは綺麗に残して、全てをぐちゃぐちゃにしてからファブレ公爵に見せ付けてやりたいことも。

ファブレ公爵とお前が和解出来ているときを狙って、ファブレ公爵の腕の中でお前を血まみれにしてやりたいことだって、お前は知らない。

「そっぴや、もうすぐナタリアが来るんだろうな。メンドクセー！
また、約束思い出せってうるせーんだろな」

ルークは窓の外を見た、もうすぐ来るはずの幼馴染を疎みながら。その時、ガイは思った。このまま首を絞めたらどうなるのだろうか、と。ルークは驚くだろうか、親友だと信じていた相手が自分を殺すことに。

「はー、何度思い出そうとしたって無理だっつーの」

このまま首を絞めてしまえば、そうすれば今まで願っていた復讐は果たされる。自分が味わった苦痛と同じ、誕生日という特別な日

に最高の悲しみを味あわせることが出来る。

ルークの首に手を伸ばした、その時だった。

「どうしたんだよ、ガイ？」

振り向いたルークに、ガイは手を戻すことが出来なかった。不自然な動きをしているガイを見てルークは首を傾げたが、どうやらガイの思いに気付いてはいないようだった。

「ガイ……？」

早く、殺してしまえばいいのに。

「どうしたんだよ」

憎きファブレ公爵の息子を、今こそ仮面を剥ぎ取り本性を見せればいいのに。

「おい！ ガイ、聞いてんのか！」

なのに。

「ああ、ゴメンゴメン。ちょっと考えごとしてた」

殺さなかった。否、殺せなかった。

復讐のために、殺すために近付いたはずの相手なのに。躊躇ってしまった、あんなに殺したかったのに。

「ルーク様、失礼いたします」

その時、扉を叩く音と共にクロウの声が聞こえ、ガイはすぐに振り返り向いた。もしかしたら見られていたのではないか、しかしその考えはすぐに消された。

「先ほどナタリア様にお会いしまして、すぐに応接間に来るようにとのことです」

「ちえ、もう来たのかよ……」

ルークは舌打ちをし不機嫌そうな顔をしながら、扉を開ける。クロウはルークを見ると一瞬驚いたような顔をして、ベッドに座っているガイを見て納得したという顔をした。

「此処に居たんですか、私が探しに行く必要はありませんでしたね」
「お前と入れ替わりで来たんだよ、それよりナタリアに具合悪いとか適当に言ってくれよ」

「駄目ですよ、さあ行きましょう」

「ちえーメンドクセってーの」

ため息をつきながら、応接間に向かうルークは少しながら嬉しそうにも見えた。どうやら完全にナタリアを嫌っているようではないらしい。

すると、何時までも部屋に留まっているガイを見てか、クロウは一瞬だけガイを睨むような目をした。

「何時まで居るつもりですか？」

クロウのその一言で、ガイは自分がほぼ放心状態だったことに気付いた。行き場の無い手を中に浮かせ、虚ろな瞳のガイはそうとう怪しく見えるだろう。

「あ、いや……すぐ出る」

今にでも倒れてしまいそうなほど歪な歩き方で、ガイは回りのものを支えにようやくルークの部屋を出た。

その、あまりにも不自然ながら危なそうな動きにクロウはすぐに、倒れてしまいそうなガイの体を支えた。

「どうしたんですか？ 具合が悪いならばすぐに休んで」
「いや、なんでも無い。なんでもないんだ……」

何故、殺せなかった。その言葉が頭の中で廻りループし壊れた蓄音機のようにガイの頭に響き渡る。

何時でも殺せるつもりだった、チャンスがあれば今すぐにだって殺せる覚悟があった。それなのに、殺せない。

どうして、何故、だって相手は自分の家族を奪った相手なのに。今まで憎しみしか抱いていないはずの相手だったのに、それなのに自分はその場で、絶好のチャンスの時に殺せなかった。

「（くそっ！ どうしてだ、ガイラルディア！）」

そう、自分の本名を何度も頭の中で叫ぶ。

「（俺は、俺はこの家をぶっ潰すために来たんだ！）」

なのに、復讐を誓ったはずなのに。自分の手はルークを殺せなかった。

「（どうして……っ！ どうして……！）」
「いい加減にしてください」

それは、怒りを含んだ。けれども優しさのある声だった。その声の主にガイは驚きを隠せなかった。

「それで何ともない？ どう見たって危ないです。自分の状態がどうなのか、そんなことも把握出来ないようでは使用人として失格ですね」

まるで煩い姑のようだ、クロウの言葉があまりにも耳障りが悪く、なによりルークのことで苛々していたせいかガイはため息交じりの声でクロウを突き飛ばそうとした。

「……大丈夫だって言って」

けれど。

「その姿を見てルーク様が心配しないとも思っているんですか？」

「な……っ」

「親友の貴方の具合が悪ければ、ルーク様が心配いたします」

心配、たしかにルークは自分の具合が悪いと知れば心配するだろう。ルークは態度は悪いが根は優しい子だ、だから自分の具合が悪いと知れば今すぐにでも。

「貴方は、ルーク様の親友なのですから」

何故だろうか、どうしてもこんなにも心が痛む？ 本来、何も知らない人間から見れば自分とルークは親友に見えるだろう。そうだと、そのための仮面だったのだから。

けれど、そのための仮面が剥けないでいる。ルークなどどうなってもいい、最終的には殺す予定なのだから。だからルークが裏切っ

ていたことを知っても、それで傷つき悲しんでもいいのに。
それなのに、どうして。

「（どうして、俺は恐れているんだ？ ルークに嫌われることを、
この信頼関係を失うことを！）」

ルークとの信頼や友情を壊すことに怯えている、それはいくら無
視しようとしても無視できない感情だった。

恐い、ルークのことを裏切るのが。この関係を、この友情を壊し
ルークを殺すことに怯え拒んでいる。復讐心がルークを殺し復讐を
果たせと叫んでいるのに対し、心のどこかでそれを押しとどめてい
るものがある。

「（俺は、本当にどうしちまつたんだ……？）」

幼い頃より心に誓った復讐、けれど出来ない。

何故、そんなこと分らない。けれど、もしもこれが自分の本心
ならば何故、クロウがルークを叩いた時に怒りを感じた？森で迷子
になったと聞いた時、あんなにも心が落ち着かなかった？

「（だけど、それって……）」

クロウがルークを叩いたことに怒りを感じたのは、自分以外の人
間がルークを傷付けたからではなく、ただ親友を叩かれたからとい
う理由。

迷子になった時に心が落ち着かなかったのは、自分以外の人間が
ルークを殺し復讐出来なくなるからではなく、ただ親友の安否を心
配したからという理由なのか。

「（違う……違う違う違う……！）」

分からない、今はただ自分が分からない。

「セシル……早く部屋に」

「俺は……いたいどうしちまったんだよ」

「どうしました？」

「なんで、自分の本心が分からないんだ……っ！」

まるで悲鳴のような声に、クロウは一瞬啞然とした。今まで、ガイのこんな弱い姿なんて見たことがなかったからだろうか。

すると、まるで独り言のようにクロウは喋りだした。

「人は無意識のうちに、自分に嘘をつくもの。それは自分の自尊心を守る為、信念を貫く為、思い込み、様々な理由があります」

「自分の心に嘘だつて？」

「その心の嘘を見抜くのは、親友や家族、または恋人のような存在。貴方にそのような存在が居るならば、その方に頼ってみたらいいかですか？」

親友、その言葉にガイはすぐに赤い髪の少年を思い浮かべた。ルークが、親友がこの悩みを解消してくれる。

「ルーク……」

まるで神にすぐるかのように、ガイはルークの名前を呟いた。

第12話「強さ」

応接間に来たルークを待ち構えていたのは、美しい金髪の少女、王女ナタリアだった。

「ルーク、レディを待たせるなど失礼ではありませんか！」

「誰がレディだよ、じゃじゃ馬娘」

「まあ、婚約者に向かってなんて暴言ですよ！」

まるで痴話喧嘩のようだと周囲のものたちは口々にそう零した、けれどそんな大人たちの話の話題になるとは知らず二人はその場で可愛らしい口論をしていた。

すると、応接間に少し小走りで入ってくる者が居た。クロウだった。

「ルーク様、お待たせいたしました」

「あら、ルーク。この騎士は初めて見る顔ですわね？」

駆け寄ってきたクロウを見て、ナタリアは首を傾げた。それはクロウを初めて見たというだけではなく、年齢のこともあったのだらう。

使用人で若い人間ならば沢山いた、けれど騎士となればそれは別。普通ならば成人以上の者しか居ないというのに。

「申し送れました、現在はまだ正式な誓いはしておりませんがルーク様の近衛騎士、クロウ・レイウォルトです」

「あら、じゃあ貴方が噂の？」

ナタリアの言う噂とは、あまりよくないものだろう。雇用されて

から僅か数分、むしろ数秒でルークの頬を叩いた騎士など初めてなのだから。

まあ、たとえ居たとしてもすぐさまその場で解雇されるのが普通なのだが、それで解雇されていないということも噂が広まった原因のひとつだろう。

そのせいか、回りで雑談や世間話をしていた貴族たちの視線がいつきにクロウに集まった。

「どのような方と思いましたか、私とさほど年齢に違いはないように思えますが」

「ルーク様よりひとつばかり年月を積み重ねております」

「まあ、ではまだ私と同じ年ではありませんか」

口に手を当てながら、ナタリアはまあと驚きの表情をした。すると、二人の会話を聞いていた回りのものたちが密かに話始めた。

「まだ子供か……どおりで」

「レイウォルト家も落ちぶれたものね、こんな子供を跡継ぎにするしかないなんて」

「しかも世間知らずの馬鹿ときたら……むしろ哀れに思いますわ」

お世辞にも小さいとは言えない声を、クロウは笑顔でやり過ごしていた。まるで聞こえていないかのよう。

ナタリアもその世間話に一瞬眉を顰めたが、婚約者が叩かれたこともあってかフォローに回ろうとはしない。

そもそも、回りの貴族たちが話している内容をナタリアも信じているのだろう。何より、主を叩くという愚考を働いたのだから当然といえば当然の意見だ。

「お若いことですから、何かと間違えることもありましょーうけど。」

頑張ってくださいませ」

「私ごときにもつたいたないお言葉、ありがとうございます」

クロウが丁重に礼をするところだけ見れば、それは完璧に洗礼された使用人のように思える。

けれど、クロウの愚考や噂以前に、その背中に背負われている大剣がクロウはただの使用人ではなく騎士なのだと告げる。

だから、ナタリアの言葉には若い騎士だから失敗もあるという励ましと、若い者はひっこんでいろうという嘲笑が込められていた。

もちろん、それは事実でありナタリアはそれをクロウに言ってもまったく問題無い立場なのだけだ。

「なあ、ガイは何処だよ……？」

すると、今まで二人の会話に加わっていなかったルークが突然クロウの服の裾をひっぱりながら言った。

「セシルですか？　でしたら、先ほど具合が悪かったので休ませたところで」

「ガイ具合悪いのかよ！」

クロウの言葉を遮るように、ルークは驚きと、何故それを早く言わなかったという怒りを交えた言葉を発した。

「ええ、ですがたいしたことはありませんので。安心してください」

「ガイは大丈夫なのかよ！」

「はい、部屋で休んでいま」

「部屋で休むほどのこと、大丈夫なんて言わねえっての！」

そう叫ぶように怒った後、ルークはすぐに、誰にぶつかろうとお

構いなしにガイの居る使用人室へと走っていく。

すの姿を貴族たちは啞然とした表情で見ていた、それもそうだろう、噂で聞いたルーク・フォン・ファブレという少年は大人しく王位を継ぐに相応しい品格を持ち合わせている。

年齢相当とは言えないが、ファブレ公爵家が誇る素晴らしき息子。それが噂の中でのルーク・フォン・ファブレだった。

けれど、先ほどの様子を見る限りその噂は噂でしかないと思えない。それもそうだろう、なにしろその噂のルークとは記憶を失う前のルークなのだから。

「今の見ました？」

しかし、回りの貴族たちは記憶喪失の事実は知っていても、それがどれほど重く酷いものなのかは知らない。

「あれが、ファブレ公爵家の跡取り。次期王か……」

それを知っていればルークのあの行動を見ても誰も何も言わないはずだから。

「もう15歳なのでしょう？　もう少し王位継承者としての威厳があればいいのだけれど」

別に、甘やかせと言っているわけではないのだ。

「早く記憶を取り戻してもらいたいですな、あのままで王になられたら……」

ただ。

「あの頃のルーク様に、早く戻っていただきたいですわ」

どうして、この場に居る人間はルークに以前のルークを求めるのだろう。

すると、ナタリアが走り去ったルークの後を見ながら呟いた。

「使用人を大切にするのはいいことですわ、でもルークは情を入れすぎています」

「ナタリア様？」

「ルークはもつと王者に相応しき態度を身につけてほしいですわ、人を使うことを覚え、この国を豊かに……」

ナタリアの独り言のような言葉に、クロウはすぐさま笑顔で答えた。

「大丈夫ですよ、ナタリア様。ルーク様は必ず王者に相応しき人間になります」

「そうですね……ルークは必ず、私との約束を……記憶を取り戻してくださいますわね」

その同意を求めた言葉に、黒い騎士は肯定もしなければ否定もしなかった。

ただ、優しい笑みを、けれど作ったような笑みをナタリアに向けた。すると、クロウは再びナタリアに頭を下げた。

「それでは失礼いたします、ナタリア様」

そう一言、王女に対して別れを告げるのには少々無造作な言葉を口から吐きながら、クロウはルークの後を追った。

その途中、クロウはふと立ち止まり後ろでファブレ公爵に挨拶を

している主の婚約者を見た。

「記憶を取り戻すですか……昔のルーク様を回りは求めている。ならば……」

ナタリアに向けた笑顔とは正反対の暗く、薄気味悪い表情でクロウは呟くように言った。

「ならば、今のルーク様は誰が見ているのですか？」

忙しく働いている使用人の間を通りすがりながら、ルークは自分の使用人であり親友であるガイの部屋に一目散に駆けていった。

その姿は、今日で15歳を迎えた少年とは思えないほど幼く見えた。周りの使用人たちは、何故ルークがこんなところに居るのかと首を傾げたが、ルークの走っていく方向を見て納得した。

「ガイ、大丈夫かよ！」

部屋のドアをノックせずそのまま突撃するかのように入ってきたルークに、ガイは一瞬驚きの声を上げそうになった。

「ルーク、お前どうしたんだ？」

「クロウからお前の具合が悪いって！　いったいどうしたんだよ！」

切羽詰まった表情でガイに問い詰めるルークに、ガイは喋ること

が出来なかった。

こうやって、大好きなお菓子やご馳走のあるパーティから走ってきたということは、それほど自分のことを心配してくれている証拠。その信頼が、とても嬉しいと同時に悲しい。何れこの信頼を裏切ることになってしまうのだから。

「ガイ！ そんなに具合悪いのか？」

苦しい、今まで感じたことなどなかった感情があふれ出す。

「いや、大丈夫だ。立ちくらみがしてな」

苦し紛れに口からつむいだ言葉を聞いて、ルークはホッと安堵した顔を見せた。

「心配かけんじゃねーよ！」

「あははは、悪い悪い」

こうやって笑いあうことすら、復讐を果たした後では出来なくなってしまう。そう考えた瞬間、急に恐くなった。

「ガイ？」

急に落ち込んだガイを不思議そうに、ルークは覗きこんだ。その碧色の瞳は、純粹に親友を心配している。

それが耐えられない、この少年を裏切ることが恐い。

「どうしたんだよ、やっぱり具合悪いんじゃないのか？」

自分の手の届くところに、復讐してやると誓った人間の息子が居

る。

自分の手の届くところに、この屋敷で初めて出来た親友が居る。

「ルーク……」

この部屋には、復讐をするために磨いでいた剣がある。今ならばルークに怪しまれずにその剣を取ることが出来る。

ガイは、ルークを見ながら剣に手を伸ばした。まるで何か答えを求めるかのように。

その時、外からメイドたちの声が聞こえた。

「ルーク様？ どこにいらっしゃいますか？」

それはもうすぐ始まる式の主役であるルークを呼ぶ声だった。そのメイドたちの声を聴くと、ルークはいやそうな表情をした。

「突然居なくなってしまうんですもの、ルーク様にも困ったものね」
「そうね、以前のルーク様も手がかかるといえばそうでしたけど……」
「今のルーク様は」

メイドたちのかすかな陰口に、ルークが強く拳を握り締めたのをガイはたしかに見た。

こんな陰口を聞けば気分を害するのは当然だ、けれどルークが怒りを感じたのは手間がかかるという言葉だけではなかった。

「過去が無くて、辛くないのか？」

一番ルークに堪えていたのは、以前の自分と比較されることだった。

いくら自分の過去とさえ、ルークにとって過去とは他人に等しい

もの。だから、ルークにとって過去の自分と比べられるというのは苦痛でしかないのだろう。

「辛くないって言えば、嘘になる」

けれど、ルークはガイの質問にそんな痛みを微塵も感じていないかのように明るく答えた。

「でもよ、過去ばかり見ても前に進めないだろ？」

「……っ！」

その言葉は、まるで自分に言われているかのように思えた。

復讐することが前に進むことだろうか？ルークを殺し、シュザン又婦人を殺し、ファブレ公爵に悪夢を見せることがガイの生きる意味だった。

けれど、それは前に進むことになるのだろうか。復讐という過去にしがみついているだけではないのだろうか。

「俺だってよ、そりゃ記憶思い出したり、過去の自分になってみようと思ったことだってあるぜ？」

でも、とルークは続けた。

「やっぱり無理だった。前はそれが使命みたいに思えたけど、過去の自分になることだけが前に進む方法じゃないって気付いたんだ」

きつと違っのだろう、たしかに復讐をすることでガルディオス家の無念を晴らすことは出来る。

けれど、それ以外の方法でも。ルークのように、たとえ目的が変わるうとも前に進むことが出来るのだろう。

「前に……進む」

ルークの言葉を繰り返すように、ガイは呟く。

「それに、こう考えられるようになったのもガイのおかげなんだぜ
！」

「俺の？」

それは以外だった、疑問を浮かべる自分にルークはまるで髪の色と同じ太陽のように笑った。

「昔の俺のこと、ガイは嫌いだったんだろ？ だったら、ガイに好かれてる今のまんまでもいいかって思えるようになったんだぜ」

だから、使用人たちに何を言われても辛くないし、ガイが居るから大丈夫。そう、ルークは言葉には出さなかったが語っていた。

そのルークの優しい、否……親友として当然の言葉。それがとても温かく、ガイの目から僅かな涙を零させた。

「お、おい！ いきなりどうしたんだよ」

普段、ルークの前で涙を見せないガイが泣いたことに驚いたルークは、照れくさそうに顔を赤らめた。

「前に、進むか……」

今まで、復讐だけが前に進めるものだと思っていた。それが、生き残った自分がするべき使命であり運命であると。

けれど、もしかしたら自分は自分を無意識のうちに追い詰めてい

たのかもしれない。復讐をしなければならぬという、脅迫概念。もちろん、自分自身フアブレ公爵にまったく恨みがないとは言えない。けれど、そのために目の前にいる親友を殺すことなんて出来ない。

「（ようやく分かった……）」

何故、あの時ルークを殺せなかったのか。今、ようやく長い時間をかけてようやく理解できた。

「（俺は、ルークと親友でありたいんだ）」

もしかしたら、前から気付いていたのかもしれない。ただ、それを認めたくなかっただけで本当はずっと前から願っていた。

復讐のことなんて忘れて、ルークを親友として信頼できることを。何も無いままさらな関係で親友になれること。ずっと、望んでいたんだ。

「ありがとうな、ルーク」

俺の背中を押してくれて。

「失礼いたします、ルーク様がこちらに……ルーク様！」

ドアのノックと共に聞こえたのは、クロウの声だった。どうやらルークを探しにきたのか、ルークを見つけるとすぐさまかけよる。

「お時間です、応接間へ」

「分かった、んじやな。ゆっくり休めよ」

クロウが言い終わると同時に、ルークはガイに急いでさよならを言うすぐにクロウが入ってきたドアから外に出た。

部屋に残されたクロウは、ベッドの上で上半身を起こしているガイを見て、以外にも微笑んだ。

「ルーク様はとても強くていらっします、だから貴方にあのような言葉をおかけになったのでしょうか」

その言葉から、クロウがガイとルークの会話を聞いていたことが分かった。けれど、ガイはそれを咎めようとはせず、ゆつくりとまるでルークの後を追うようにドアを見つめた。

「過去とは柵であり、苦痛でもある。けれど、それを乗り越えることが出来るのですから……だからルーク様はとても強い」

「そうだな、過去なんてそう簡単に乗り越えられるもんじゃない。それは俺がよく知ってる」

「貴方は『過去の痛み』を知っている、ですからルーク様の痛みも分かるでしょうね」

すると、クロウは振り向いてガイを見た。

「貴方の痛みがどんなものか知らない、けれどそれを乗り越えられることを祈る」

「ずいぶん優しいんだな」

「それが、ルーク様の望みでしょうから。貴方はどうか私には出来ない『親友』としてルーク様を守ってください」

それは、今までガイに敵対意識を持っていたクロウの言葉とは思えなかった。けれど、これがクロウの本心なのだろう。

「貴方は、ずっとルーク様の傍で笑っていてください」

それが、ルークを救い守る術だ。クロウは微笑みながらそう言った。

「俺は、前に進んでいいと思うか？」

「当たり前でしょう、そうしなければルーク様が悲しみますので」

そう言うと、クロウはルークの後を追おうとドアの前に歩いていく。もうすぐクロウの誓いが始まる時間だと言ったことを時計が示していることに気付き、ガイも準備を始めた。

「それでは、私は先に失礼いたします。貴方も復帰できるのであれば、ルーク様にその趣旨を伝えてきますが」

「ああ、たのんだ……」

黒い髪を揺らしながら、クロウはガイの部屋から出ていった。その姿を、ガイはただ無言で見ていた。

そして、クロウの姿が完璧に見えなくなったことを確認して、ベツドの隣りにある小さい棚の引き出しを開けた。そこには、古びた写真が大切そうにしまいこまれていた。

「マリイ姉さま……」

その写真の女性に語りかけるかのように、ガイは呟いた。

それは昔懐かしき姉を懐かしむよう、けれどまるで今そこに居る存在として語りかけるかのようなのだ。

「俺、前に進んでもいいと思いますか」

けれど、その言葉に答えてくれる人間はいなかった。あたりまえだろう、彼女はもう此処には居ない。殺されてしまったのだから、ファブレ公爵に。

だから誰も居ない、空しい質問だったのかもしれない。それでも、ガイは続けた。

「この憎しみを忘れるわけじゃありません、姉さまのこと忘れるわけじゃない、でも……っ！」

過去を忘れるわけではない、ただ向き合い方を変えるだけ。それをする事によって変われるのだろうか。

けれど、ルークは変わることが出来た。過去の自分を捨て、過去の自分とは違う生き方をする方法を見つけ出した。だから、自分も復讐のことは忘れない。けれど。

「あいつ、ルークと親友でいられる復讐でもいいですよね」

零れ落ちた涙のことは、きっと誰も知らない。

第13話「決意の剣」

その空間を始めて見た人間なら、きっと誰しもがすごいと口をもらすであろう。

完璧な味と外見の料理たち、美しく飾られた花々、華やかなドレスに身を包んだ華々しい貴婦人たち、完全なまでの使用人に、白光騎士団により鉄壁の警備。

けれど、赤毛の少年はそんな素晴らしき空間の主役だと言つのに。

「はあ、めんどくせー」

こんな使用人たちの苦勞が報われぬ言葉を呟いていた。

「もうすぐ終わりますよ、ルーク様」

なだめるクロウは普段の非常に実用的な服に比べ、やけにゴテゴテした飾りのついた動き難い正装に着替えていた。

近衛騎士と言えど伯爵家の息子、なにより騎士の誓いというイベントまであるのだからこうした正装はしなければならない立場なのだろう。

本来、この日にはルークの近衛騎士を紹介するというものだったのだが、誓いが一週間後に伸びてしまったのでこのような形となつてしまった。

まあ、こちらの方が花があるといえはそうなのだが。

「つか、お前もんなカツコで疲れねえーのかよ」

「そうですね、装飾品は実用的ではないので非常に動き難いという難点が」

「だろ？　　ったく、なんでこんなもん着ねえとなんねえんだかな」

背伸びをしながら椅子に腰掛けているルークに、クロウはふと思ったことを質問した。

「本当に、私が騎士でよろしいのですか？」

その質問に、ルークは一瞬呆れた顔をした。

「どーせ、嫌だっつっても無理なんだろう？」

父親に何を言っても聞いてもらえなかつたのだ、嫌と言ってクロウを解雇できているのなら既にクロウは此処に居ない。
出会って数分のところで最後の別れを告げていただろう。

「だったら……」

「出来ますよ、ルーク様が嫌でしたら」

「は……？」

「ルーク様が仕方なく私を騎士にするのであれば、正式な騎士ではないので意味に誤差がありますが、今すぐファブレ公爵様に辞表を提出いたします」

その言葉に、一瞬ルークは驚いた。こんなクロウの言葉をほかの騎士が聞いたらなんと言うか。

ファブレ公爵家に使える白光騎士団に入隊し、さらにはその一人息子であるルークの近衛騎士になれる権利を自ら捨てる行為を愚考と言わずしてなんと言うか。

けれど、目の前の騎士は、クロウはそんなチャンスを自ら捨てると言った。

「最初に言ったように、私は誓いに尊敬を払わない者や、本心では

する気の無い者と誓いは結びません」

その言葉に、初めてあつた時の記憶が蘇る。

「誓いは騎士と主の間に絶対の服従があることを証明するもの！
それを蔑ろにする者に忠誠を誓うなど反吐が出る！」

正直、今まで何度か怒られたことはあつたが。叩かれ、強烈な言葉
葉を浴びせられたのは初めてだった。

しかし、あのクロウの怒りようは正直異常だと今でもルークは確
信している。けれど、これほどまでに真面目なクロウをあそこまで
怒らせるほど、騎士の誓いとはすごいのかと興味も出てくる。

「騎士の誓いって……そんなにスゲーのか？」

「行為自体は簡単です、けれどそこにある意味は深く重いもの……
主に永遠の忠誠を誓う儀式です」

そう言われても、ルークにはイマイチ実感が無い。永遠の忠誠な
どほかの騎士だって誓っている、けれどそれには騎士の誓いなどと
言う面倒なものは使わない。

だから、クロウの言う騎士の誓いも同じようにしか感じられない。
そんなにたいしたものなどではない、そんな表情をしていたことを
クロウは分かったのは少し顔を顰めた。

「それで、本当によろしいのですか？ ルーク様の意思をお聞かせ
ください」

「俺は別に……まあ、嫌じゃねーけど。土下座して頼むほどじゃね
えーけどな」

その曖昧なルークの言葉に、クロウは怒ったのだろうか。普段ルークに使う丁寧な口調が少々荒くなった。

「はつきりと言ってください、私を騎士にすることに不満があるのならば！」

「べ、別に不満とは言ってねーだろ?! た、たしかにヴァン師匠よりは弱いけどそれなりに強いみたいだし」

「ならばはつきり、言ってください。騎士の誓いにはそれなりの覚悟が必要なのですから！」

クロウのあまりにもまっすぐな、そしてものすごい気が込められている目を直視出来ず、ルークはとっさに目をそらした。

あの闇のように黒い目は、まるで神話に出てくる全てを石にしてしまう魔眼を連想させる。それほどまでに、クロウの目が恐い。

「だー！」

この視線に耐えられなくなったルークは、悲鳴を上げた。

「さっきから、俺のことだの覚悟だの! じゃあ、お前はどーなんだよ!」

その言葉を聞いた途端、クロウの瞳からは先ほどの殺気にも似た眼力が失せ、何かに気付いたかのように目を丸くした。

ルークとの距離20センチのところから自分の定位置に戻り、納得したような素振りを見せた。

「そうですね、たしかに私はまだ誠意を見せておりませんでした」

すると、クロウは服のコートの前を空ける。そのコートは、外見は普通だったが中身が凄まじかった。

「な、なんだよそれ……」

ルークがこんな言葉をこぼした理由は、きっとこのコートを見たものならば誰もがもらすであろう。

コートの内側には無数のナイフがほぼ全てのスペースを占めていた。

「レイウォルト家専用のものです、戦闘用のものです」

唖然としているルークをよそ目に、クロウはそのナイフの中から一番大きく、むしろ短剣と呼ぶに相応しいものを取り出した。

「これをルーク様に」

古さを感じさせる短剣は、豪華とはいいがたいが細かな模様が描かれていた。それを受け取ると、その短剣の重みがずっしりと手に押し掛かる。

多少の宝石が埋め込まれた柄を取ると、銀色に輝く刃が見えた。ずいぶんと丁重に扱われていたのだろう、それはまさに新品と言っても過言ではないほど光輝いている。

「この短剣が、どうかしたのかよ」

たしかに、綺麗なものだがそれ以上ではない。

けれど、次のクロウの言葉により。この短剣はルークにとっても重みのあるものになった。まるで綿が鉛に変わったかのように。

「私が騎士として信用なら無いと思った時、これで私を殺してください」

一瞬、ルークの中で時間が止まった。

「はあ………？」

この青年は何を言っているのだろうか、まるでそれが当然だとも言うかのように。

「この剣をルーク様が私に向けた時、私は一切抵抗しません。素直に死を受け入れましょう」

「ふ、ふざけんなよ！ そんなもんもらえるわけ………っ！」

目の前にある短剣を今すぐにでも捨てたくなる、これを受け取るということは即ちクロウの命を受け取るも同然だ。

だが、クロウはルークが付き返した短剣を受け取らない。

「では、私はルーク様と騎士の誓いをする事が出来ません」

「こんなもん無かったって、誓いぐらい出来るだろ！」

「私はただ覚悟をその短剣に込めただけ、これを受け取らず騎士の誓いをして結局は同じ、私は貴方のために死にます」

「………っ！」

「これが私の覚悟です、そしてこれこそ私の騎士の誓いです」

クロウのその瞳には一切の迷いはなく、これが本気だということを語っている。

「俺は………っ！」

こんなもの、受け取れるわけがない。けれどそれはクロウを近衛騎士にしないと同じ、それは正直迷ってしまった。

言葉であんな風に言っただけにはいるが、実際少なからずクロウのことは信頼している。野獣から自分を守ってくれた時だって、あの夜誓ってくれたことだって。

だから、本心を書いてしまえばクロウと誓いを結んでしまいたい。多分これ以上、信頼できる近衛騎士にめぐり合えるか自身がない。

「ですが、私は絶対にこの短剣を使わせません」

ルークの不安をなだめるかのように、クロウはそう優しく言った。

「ルーク様の信頼を裏切ることなんてしません、それだけは言えます」

「っ……」

「けれど、この短剣を受け取るかはルーク様が決めることです」

クロウはそう言うと、ルークの判断を待った。その誠実な瞳は、初めて会った時感じた冷たいものではなく、とても優しさに満ちた目。

握っている短剣を見た、これを受け取るとはクロウの命を受け取るのと同じ、けれど。

「ふん、いいじゃねーか。受け取ってやるぜ」

「ルーク様……っ！」

ルークが言った言葉を聞いた瞬間、クロウの顔から笑顔がこぼれた。その笑顔を見ると、何故かルーク自身も嬉しさを感じた。

けれど、何故かそう感じたことが恥ずかしくなりつい視線をそら

してしまう。

「ま、まあ！ お前ってけっこう出来るやつだし、ほかの奴の騎士にすんにはちつともったいねーからな」

「ルーク様にそのような評価をいただけで、すごく嬉しいです」

「なっ！ だから、なんでお前はいつも……っ！」

どうも、人から感謝されることに成れない。きっと今後も、成れていけそうにはないだろう。

けれど、こうやって感謝されることも悪くは無い。

「それではルーク様、そろそろお時間ですので」

「ちゃっちゃと終わらせようぜ」

ルークはクロウに促され、父親の居る応接間へと足を進めた。豪勢な扉が使用人によって開かれ、普段よりも数倍美しく飾られた応接間が視界に入る。

気品溢れるそこは、まさに選ばれた貴族だけが入れる理想の空間。その主役として、ルークは足を踏み入れた。

敷かれた赤い絨毯の上を、ルークは威風堂々とまでは行かないが、それなりに気品のある歩き方をした。その後にはクロウも続く。

そして、この屋敷の主であるファブレ公爵と夫人の前で止まる。

「ルーク、誕生日おめでとう」

「ありがとうございます、父上」

あまり本心とは思えぬ言葉に、ずいぶんと冷淡な会話に聞こえる。しかし、これは誕生日の日にはこうやって会話をすると決められている。

すると、ラムダスがこの場に居るもの全員に告げるように声を大

にして言った。

「これより、騎士の誓いを始めます。クロウ、前に」
「はい」

その言葉に導かれるかのように、クロウはルークの目の前にたった。その姿は、とても凛々しい騎士だ。

「それでは、誓いを」

ラムダスの言葉と共に、クロウは己の大剣を取り出す。その刃は美しく輝き、煌きを宿している。

クロウはルークの前に跪き、そして己の主に剣を捧げた。それは、まさに絵になる格好だった。

赤き髪を持つルークに、それに対になるかのように漆黒の髪を持つクロウ。それはまるで、太陽と暗闇のようで、けれどもとても美しい。

王室画家がこの場を見たならば、今すぐにも筆をとりたくなるような美しさと気品を兼ね備えるこの場は、そこに居た全ての人間が感嘆した。

だが、その場はすぐに惨劇に包まれた。

「っ！！」

鋼と鋼がぶつかり合う鋭い音が聞こえたかと思うと、豪華に飾り付けられていたケーキが鈍い音を立てて地面に叩きつけられた。

「い、いやあああああ！」

ナタリアの悲鳴が上がり、回りの人間も声にならぬ悲鳴を上げた。そして、先ほどまでルークに捧げられていたクロウの剣は、この場に響いた金属音の原因となっていた。

刃をこすり合わせる音は辺りに響き渡る、人々の視線はそれを見ることが出来なかった。

「貴様……っ！」

ファブレ公爵の悲鳴とも思える言葉の原因は、もう一人の騎士だった。

「裏切り者が……っ！ グレン・ラスカー！！！」

クロウの目の前にたっていたのは、白光騎士団団長だった。

第14話「正義であり続ける理由」

突然の攻撃に、白光騎士団の者は誰も反応出来なかった。否、正しくはしたくても出来なかったのだらう。

何故なら、主であるファブレ公爵の息子に剣を上げたのは、他ならぬ白光騎士団の団長、グレン・ラスカーだったのだから。

「何をしている、早く捕まえろ！」

しかし、ファブレ公爵の命令に白光騎士団の人間はすぐに動けなかった。

今まで慕っていた上司の行動がすぐに理解できない、全員がそんな表情を見せている。まさに困惑という言葉はこのためにあると言っても過言ではないだろう。

白光騎士団が迷っているうちに、既にこの美しく彩られた応接間は刃と刃がぶつかり合う戦場へと化していた。

「白光騎士団の隊長たるものが、いったいどうしたと言っただい！」

クロウが、刃をぶつけ合う衝撃に顔を歪ませながら、そう叫ぶ。

「私は名誉を得る為に白光騎士団に入ったわけではない……全ては、復讐のためだ！」

その遠吠えとすら思える叫びと共に、グレンはクロウの大剣を弾き返した。その衝撃は、近衛騎士に任命されたクロウとはいえ顔に苦痛を浮かべるほど凄まじい。

そもそも、僅か16歳のクロウが白光騎士団の隊長であるグレンと戦うこと自体が間違っているのだ。体格、経験、腕力、全てにお

いてクロウが優っているものなどありはしない。

「ッ！」

その時、一人の白光騎士団が己の剣を慕っていたグレンに向けた。その顔は酷く悲しい表情をしていた。

しかし、その刃は脆くも吹き飛び空しい音を立てて地面に落ちた。クロウと戦っていたながらも瞬時にこの行動が出来たことを、こんな場でなければ誰もが喝采を送ったに違いない。

それほどまでに、グレンの力は素晴らしく、そして強豪だった。

「やああああッ！」

こうなったら数で勝負だと、白光騎士団たちは次々にグレンに刃を向け始めた。けれど、選ばれたエリート達も自らの隊長には敵わない。

グレンにとって白光騎士団は蟻のような存在でしかないのか、さまざまの速さでグレンの剣は白光騎士団の剣を跳ね返していく。

それは、クロウも同じだった。

「ッ！ あ、ああ！」

その体は吹き飛ばされ、地面へと叩きつけられる。けれど、クロウは顔を歪めるだけで悲鳴らしい悲鳴は一切上げなかった。

「この……ッ！」

クロウは再び己の剣を構えグレンに突撃する、だがクロウの攻撃はいとも簡単に防がれ刃が混じる音が響く。

すると、ファブレ公爵は己の剣を取り出し、グレンの前へと進み

出た。

「復讐の相手は私であろう、なぜルークを……ッ！」

その言葉は、たしかに自分の息子を守りたいと願う父親のもだった。その目には、普段見せない必死さが見え隠れしている。

すると、グレンはまるでその反応が欲しかったかとも言うつかのように頬を吊り上げた。

「ああ、そうだ。けれど、貴様に直接復讐しては意味が無い。貴様を一番苦しめるために、私は……私わあああああ！」

グレンの雄たけびは響く、まるで一つの刃のように。

その刃はルークに向けられているが、実際に向けられているのはルークと、ファブレ公爵のどちらだろうか。

「はあああああああ！」

だが、その刃に必ず立ち向かう青年が居た。彼の思いも刃となり、盾となりルークの体が刃の餌食になることを防いだ。

音と火花をたて、互いの想いの刃はぶつかり合う。きっと想いだけで戦うのならば、二つの刃は互いにはじき返されただろ。だが、想いだけでは拭えぬ強さがクロウの剣を再び弾いた。

「ッああ！」

そして、その刃はクロウの体を僅かに引き引き裂き、王家の証である髪の色と同じものを花びらのように辺りに散らした。

「私はずっと望んでいた、この手で貴様に同じ苦しみを味合わせる

ことを……目の前で自分の息子を殺してやることを！」

グレンはそう、悲しみを交えた声で叫んだ。

「貴様に分かるか！　目の前で愛する妻と子供を殺され自分だけ生き延びた苦しみが！　私を庇って、次々に殺されていく仲間の姿が！　私はその復讐を果たす為に生きてきた、この10年間……ずっと！」

その憎しみがどれだけのものか、想像がつくものは居ただろうか。けれど、グレンはたしかに憎んでいた。己の愛するものを奪い目の前で消していったファブレ公爵のことを10年間ずっと。

「だから、復讐か……」

「そうだ！　貴様の悪行、今すぐこの私が断罪してくれるッ！」

グレンの叫びは刃となった、その表情からは以前感じられた優しくも厳しい白光騎士団の団長の面影は無い。

その顔は憎悪に歪み、復讐鬼と化していた。

「同じだ……ッ」

復讐に歪むグレンを見ながら、ガイはそう呟いた。けれど、この戦場でガイの言葉を聞き取れたものはいない。

何故なら、ガイの同士の存在を嘆く言葉など、此处ではたいした意味もなければ、刃と刃がぶつかり合う音にかき消されてしまうからだ。

「……悪行だと？　馬鹿馬鹿しい」

けれど、その声だけは。クロウのグレンの言葉を嘲り笑う声だけは、どんなに小さくともグレンの耳に止まった。

「この男の行為を悪と言わずして何と言うか！ 私の家族を、仲間を、故郷を……っ！ 私の全てを奪った悪魔を……っ！」

グレンの憎しみは手に取るように分かる、それがどれだけ強大で深く苦しいものなのか、この場に居た全員が分かる。否、分かってしまう。

けれど、グレンの怒りを知っても、それでもクロウは嘲笑った。まるで、恐いものなど無いかのように。

「悪だと？ まさか、貴方のような方が『悪』の定義すら知らぬ愚者だとは」

「なんだと」

自分の憎しみや復讐がこんな子供に否定され、さらには愚者とまで呼ばれるとは思わなかったグレンは、その怒りを顔に浮かべた。だが、クロウの表情は清々しいまま。そして、相手の無知を嘲笑うかのようにクロウは続けた。

「不幸な身の上には同情してやろう、だが己の身分も弁えずファブレ公爵様を悪呼ばわりしたことは許せることではない」

「己の身分だ……？」

その言葉にクロウは笑った。

「童話に出てくる正義と悪がこの世界で通じるとも？ 否、童話ですら語っているではないか……正義とは即ち勝者であり、悪とは敗者であることを！」

「貴様は勝利さえすれば、たとえそれがどんな悪逆非道な行為でも正義だと?!」

「ああ、そうだ! 正義とは勝者のみが語ることの許される栄冠であり、悪とは敗者が背負うことになる汚名だ。そんなものも理解せず、敗者のくせに己の立場を弁えずファブレ公爵様を悪と呼び、自分ばかりで断罪者気取りか。貴様のような者を見ていると反吐が出る!」

クロウの声は、次第に嘲笑うものから嫌悪の域まで達していた。それほどまでに、グレンの言ったことが愚かしいと感じられたのだろう。

しかし、クロウの言ったことは回りから聞けば、なんて暴言だと避難を浴びるだろう。たしかにそれは、人間個人的に言ってしまうは過激だと思われる。

だけど、戦争も、童話も、どちらもクロウの言っていることを語っている。勝者はもてはやされ、どんな虐殺も正義の鉄槌と称される。けれど、反対に敗者は勝者と同じことをしていても虐殺と避難される。

「正義を語りたいなら、勝利を得ろ! 断罪者の顔をするならば復讐を達成してからにしろ!」

だから、それを理解していたからクロウは。

「だから、私はルーク様のために正義であり続ける」

勝者とは即ち正義であるならば、正義とは即ち勝者である。クロウはこの場で、自分は勝者であり続けると誓った。

それは、正義という言葉の汚さを知ってなお、たとえ望まれぬ勝利でも、世界中から悪逆非道だと罵られようともし勝利し続け正義であり続けるという決意でもあった。

「はああああああああっ！！！！」

クロウの雄たけびは大剣と共に宙に舞い、獲物を狙う鳥のようにグレンの刃へと向かう。それには僅かならの音素が帯びていた。

その僅かな音素は次第に形を作っていく、それは赤い刃となり具現化していく。まるで翼のように開いた刃はグレンの剣と交じり合い激しい音を立てた。

「……っうっ！！」

先ほどは感じられなかったクロウの強さと、グレンは己の腕にくる痛みと力によって感じ取った。

「っ！！」

ようやく弾き返したものの、クロウの大剣の威力は劣らない。なにより、第五音素の力によりグレンの腕は軽度だろうが火傷を負っているだろう。

このままでは持たない、そう直感したのかグレンは本来の標的に剣の先を定めた。

「ルーク様っ！！」

グレンの刃はルークに向けられていた、今までの状況を啞然とし

てみていたルークにとって刃が自分に向けられるということは、再び恐怖を覚えること。

そして何より、恐怖に体が縛られずに動けない。金縛りという言葉が相応しいだろうか、体が危険を訴えているのに動かない。

いくら剣術をヴァンから教わっていようと、ルークは一般人でしかなく剣が無ければ対抗することも出来ない。殺意だけではなく憎悪まで向けられてしまえば、ルークが動けなくなるのは明確だった。

「っ……！」

ルークは思わず目を伏せた、己にはもうあの剣を体で受けるしか方法が無いと思ったのだろう。

しかし、身構えたルークに体を貫く痛みは何時までまってもこなかった。代わりに感じたのは生暖かい何かと、鈍く重たい音だった。

「どうして……っ！」

再び瞼を開けたルークの視界に映ったのは、クロウだった。けれど、普段見るクロウには無い何かがあった。

それは銀色の輝きを帯びながら、赤い血を滴らせる刃。その異常な存在が主張しているクロウの後姿を見て、ルークは瞬時に理解した。

「俺を庇ったのか？」

ルークの言葉にクロウは頷かない、けれどクロウのした行為はまさにルークの発した言葉通りだ。

「っ……！」

そして、クロウを指したグレン自身も驚いているらしい。その手は振るえ、今にでも剣を落としてしまいそうなほどに。

だが、クロウはそれがなんともないとも言うかのように平然とした顔だった。腹を刺された痛み顔に顔を歪めるが、それでも清々しいと思える程度だ。

「震えている」

そう言いながら、クロウは笑った。

「貴様は以前にもこう言っていたな、私と自分の息子が似ていると」

クロウは己の手が傷つくことも恐れず、己の体に突き刺さる剣を引き抜いた。グレンはその剣を持ち続けることが出来ず、剣は空しい音を立て地面に叩きつけられる。

「無様だな、騎士とあろうものが己の剣を地面に落とすなど」

己の服に血が広まっていくことも、クロウはまったく気にしていなかった。

それどころか、目の前にいるグレンという男を軽蔑するような視線で見ている。

「復讐の覚悟を決めているながら、息子に似たものを刺しただけでこれか？ まったく、臆病者という言葉すら貴様にはもったいない」

「わ、私は……」

「情けない男だ、これで復讐者とは笑わせる」

すると、クロウは再び己の大剣を掲げた。それはたしかにグレンの胸を突き刺そうとしていた。

「一つ教えてやるう」

その時、クロウは何かを思い出したかのように喋った。まるで、何か面白いことを思い出したかのように。

「貴様は私の父親にとてもよく似ている、面影や風格、そして自分の息子や妻のために必死な部分は酷似していた」

だが、とクロウは続けた。

「それでも、私は貴様を殺せる。たとえそこで蹲っているのが本物の父親だろうと」

「クロウ……？」

「親殺しという不名誉を得てさえ、私はルーク様のために勝利し続ける……ッ！それが私の、騎士の誓いだ！」

クロウの顔はすぐに冷酷な表情へと代わった、その言葉が言い終わった瞬間、クロウの大剣はグレン目掛けて振り下ろされた。

第15話「騎士の誓い」

「やめ……っ！」

一瞬、僅かな声でルークが叫ぶ。しかし、その声はクロウに届かなかったのだろうか、クロウの大剣は振り下ろされる。

誰もが、グレンの死を覚悟した。けれど刃はグレンの喉元で止まり、その大剣がグレンの肉を咲くことはなかった。

「しかし、貴様の命なんぞよりも私にとってルーク様の命令が今は一番大切だ」

クロウは大剣の赤い刃を消すと、鞘に大剣をしまった。回りで啞然としていた白光騎士団たちは、すぐに正気を失っているグレンの回りを囲んだ。

そして、二度と抵抗が出来ないように両手をきつくロープで縛るとは言っても、こんなことをしても意味がないことぐらい、グレンを見ていたら分かった。

グレンにはすでに抵抗する気が無い、それはきつともう自分はすでに死んでいてもいい存在だったということを知っているからだ。

「臆病者め……」

クロウの吐いた言葉は、小さくあたりに響いた。

グレンはもう一度クロウの顔を見る、その顔には一切の迷いが無い。今も、そしてグレンを殺そうとした時も。

回りでただ見ていただけの人間ならば、クロウの最後の言葉はグレンを殺さない口実にすぎないと感じていただろう。けれど違う、それは直接クロウの剣を受けたグレンにしか分からない。

クロウは本気だった、グレンを殺すことも、父親を殺すことすら出来ると言ったことも、それは脅しではなく純粋な本意。クロウの騎士としての覚悟だった。

「おい、大丈夫か！」

すぐに、ルークがクロウに駆け寄る。その心配の原因はもちろん、クロウの腹に開けられた穴、深く体を抉るほど突き刺さった傷跡だった。

回りに居たガイもグレンから視線を外し、クロウに駆け寄る。しかし、クロウは駆け寄る二人を手を出すことで制止させた。

「私は大丈夫です、それよりも騎士の誓いを続行……」

「大丈夫なわけあるか！」

今まで、大人しく見ていたルークがついに叫んだ。

ルークはクロウのところまでずかずかと回りの破片も気にせず歩いていく、そしてクロウの目の前に仁王立ちすると、苛立った表情をしながら。

「っ！」

クロウの頬を叩いた、その痛さと音にクロウは目を点にしてルークを見つめる。よく見れば、クロウの頬を叩いたせいでルークの手も多少はれていた。

それは、初めてクロウとルークが出会ったあの日のようだった。

「んな腹刺されて、大丈夫だったら今ごろ世界で治癒術なんか発達してねえっつの！」

「で、ですがルーク様。私は外傷でしたらたいしたことは」

「だとしてもだ！　いいか、お前は俺が認めた騎士なんだぞ？！
なのに、此処で死んでどうすんだってーの！」

それは、今まで曖昧だった『クロウを騎士にする』ということ
初めてルークがきちんと認めた時だった。

クロウの姿を見ていて、ルークは気付いたのだろう。これから自
分がする『騎士の誓い』とはいったいどんなものなのかを、そこに
込められているクロウの決意のこと。

それを知って、ようやく分かった。クロウの言葉の意味が、どれ
ほど重く、それが何かの比喻ではないと知った。

「俺はな！　お前以外の奴に騎士を任せる気なんかさらさらねーん
だ！」

「ルーク様……」

「お前が死んだら、誰が俺を守るんだよ！　そのくらい考えるよな
！」

ルークの言葉は酷く乱暴なものだったが、それはルークの照れ隠
しだった。

本当は素直に『お前が心配だ』と言いたい、けれどルークのプラ
イドがそれを邪魔している。だから、こんな乱暴な言葉になってし
まうのだろう。

けれど、いくら乱暴でもルークの言葉はたしかにクロウを心配し
ていた。それは紛れも無い事実で、ルークの言葉からそれを読み取
るのは簡易なことだった。

「そうですね、ルーク様を守るのは私の仕事です。他の誰にも譲る
気などありません……」

「だから、さっさと治癒術受けてこいよ……それと」

すると、ルークはクロウから視線を外し小さな声で呟いた。

「騎士の誓い、馬鹿にして悪かった……」

それは、初めてルークの口から聞く謝罪だった。あまりにも小さく、聞き逃してしまいそうなほど、呟いたような謝罪。けれど、そこにはちゃんとあやまりたいという気持ちが込められていた。

「ルーク様が、誓いの意味を知ってくだされば……それでいいのです」

その謝罪を、クロウは優しい声で受け止めた。

すると、クロウはファブレ公爵の前に歩み出た。その時、クロウの腹から滴り落ちていた血はもう出ていなかった。きっとクロウが自分に治癒術を使ったのだろう。

「おい、クロウ」

もちろん、その治癒術も簡易なものだ。本来ならば早急に治癒士を呼ぶべきなのに。

けれど、クロウは笑った。それは先ほどグレンに向けていた嘲笑ではなく、優しく温かい笑み。

「やらせてください、これが終わればすぐに治療を受けます。だから……」

騎士の誓いをやらせてください、そうクロウは目で語った。それが通じたのか、ルークは父親の前へと歩み寄り、クロウと向き合った。

ファブレ公爵もそのことを理解し、何も言わなかった。

「それでは、騎士の誓いを……クロウ、頼んだ」

その言葉と同時に、クロウは己の大剣を取り出した。

大剣は先ほどと同じく、銀色に輝いており血には染まっていない。それは、クロウがルークとの約束を守ったことを意味していた。

「約束、守ってくれたんだな……」

「はい、私はあの時の約束を忘れません。私は、ルーク様の騎士なのだから」

クロウはそう言うと、ルークに剣を捧げた。掲げられた剣は、窓から差し込む光を反射し、まるで伝説に出てくるローレライの鍵のように光輝いていた。その輝きは、ルークを守るためにある。

そして、静かにクロウは紡ぎ出す。まるで歌うように『騎士の誓い』を、そしてそれに込められている決心を語りだす。

- I wave my sword to protect you -

我剣は貴方を守る為に振るいましょう

- The myself will become yours
hield -

我身は貴方の盾となりましょう

- I life will end for you -

我命は貴方の為に果てましょう

- My name is I promise
that I become your knight -

我名はクロウ・レイウォルト、貴方の騎士となることを誓いましょ
う

TALES of the ABYSS
焰の騎士

近衛騎士編 完

N
e
x
t
・
・
外郭大地編

第15話「騎士の誓い」（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

焰の騎士、近衛騎士編完結です。

続きは、こちらでも投稿するとは思いますが、よければサイトで感想などくださると嬉しいです。

背徳遊戯

<http://mameuke.web.fc2.com/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1708j/>

焰の騎士

2010年10月15日05時33分発行